慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	明治前動物渡来年表
Sub Title	Exotic Animals Brought in Japan: A Chronology to 1868
Author	磯野, 直秀(Isono, Naohide)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2007
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 自然科学 (The Hiyoshi review of natural science). No.41 (2007. 3) ,p.35- 66
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10079809-20070331-0035

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

Hiyoshi Review of Natural Science
Keio University No. 41, 35–66（2007）

明治前動物渡来年表

磯　野　直　秀

Exotic Animals Brought in Japan: A Chronology to 1868

Naohide Isono

私たちの身辺を見回すと，ふだんは意識していないものの，外来の動物，すなわち本来は日本列島に生息しておらず，海外から渡来した種類が数多く存在する。そのなかには飼育しているものも，野生化しているものもある。いま少し細かく区分してみると――

飼育している種類

①食用・使役用：イヌ・ウマ・ウシ・ブタ・ヒツジ・ヤギ・ニワトリ・アヒル・ガチョウ・シチメンチョウなど。

②愛玩用・動物園の動物：イヌ・ネコ・ゾウ・ラクダ・トラ・パンダ・クジャク・オナガキジ・オウム・インコ・カナリア・ブンチョウ・ベニスズメ・ワニ・キンギョ・熱帯魚など。

野生化している種類

③狩や漁，鑑賞，その他の目的で放ったもの：マングース・コウライキジ・コジュケイ・カササギ・シラコバト・カダヤシ・ブラックバス・ヨウシュミツバチなど。

④飼育動物（①②）の脱出・放棄：イヌ・ネコ・ヤギ・ハクビシン・アライグマ・タイワンリス・インコ・ブンチョウ・ミドリガメ・ウシガエル・ティラピア・アメリカザリガニなど。

⑤船舶に潜入，樹木・農作物に付着，風が運ぶ，漂着するなどにより侵入：クマネズミ・ドブネズミ・ジャコウネズミ・モンシロチョウ・クロゴキブリ・アオマツムシなど。

これらの種類がいつ頃日本に渡ってきたかを明らかにすることは博物誌や文化史の大きな課題の一つであり，すでに先人の方々が『日本博物学年表』（白井1934）や『年表日本博物学史』（上野1989）などに事例を挙げておられるが，室町時代・江戸時代の鳥獣渡来に関する資料が

〒232–0066　横浜市南区六ツ川 3–76–3–D210，慶應義塾大学名誉教授。（76–3–D210，3-chome, Mutsukawa, Minami-ku, Yokohama 232-0066, Japan; Professor Emeritus, Keio Univ.）［Received Jul. 31, 2006］

十分に調べられていない頃で，事例も限られていた。

じつは慶應義塾図書館に『唐蘭船持渡鳥獣之図』という重要資料――江戸時代に長崎に渡来した多くの鳥獣を描いた図録――が前々から所蔵されていたが，その存在さえ一般には知られておらず，内容もまったく調べられていなかった。幸運にも私は偶然にその資料と出会って，詳細に検討する機会に恵まれ，さらに国会図書館や東京国立博物館などに同種の資料があることを知って，それらの資料も調査することができた（磯野・内田1990，1991，1992）。

前述のように全般的な年表には渡来動物の記事が載せられているが，渡来動物だけをまとめた年表はまだ作成されていなかった。そこで，既出の記事に『唐蘭船持渡鳥獣之図』などで得られた知見を加え，「明治前鳥獣渡来年表」と題して本誌にまとめた（磯野1993）。

その後，ふたたび偶然に狩野常信画『鳥写生図巻』（東京国立博物館蔵）の存在を知り，また室町時代から江戸時代にかけての日誌類を調べて，それらにも渡来鳥獣の記録がいろいろと含まれていることがわかった（磯野2003，2006）。このような次第で「明治前鳥獣渡来年表」も大改訂が必要となり，新知見のほかに鳥獣以外の動物も含め，記文も改めて本稿を作成した。取り上げたのは前記①②に該当する例が大半を占めるが，③～⑤についても多少の事例を含む。なお，④⑤については，「珍禽異獣奇魚の古記録」（磯野2005）も参照していただきたい。

凡例

1　年表には，推古天皇時代から明治元年（1868）までを収録し，有史以前に渡来した犬・馬・牛などは略した。一方，琉球の動物，侵入種，一部の剥製品を含めた。

2　紙面の制約から，種の特徴や原産地は記さず，藩主・蘭館長・清商などの人名も多くは省いた。単に「献上」とあるのは，朝廷や幕府，将軍などへの献上である。

3　月日：5・15のように示し，閏月は①②……とした。月日不明の項は年の最後に，「寛政年間」などの項は該当期間の最終年に置いた。7・11／7・15と連記したのは，蘭船2隻が別々に入港し，どちらに持ち渡り品が搭載されていたか不明の場合である。

4　品名：事項の記載では，なるべく原記載の漢名・漢字名を用いた。原記載が仮名のときは「　」を付した。インコについては多様な表記があるので，音呼（インコ）以外は「インコ」とした。「下鴨アヒル」など下線付きの片仮名は，原記載に記されている読み。前記以外の片仮名表記は現和名である。「ラクダ」など波線を付した場合はその種類の初見であることを示す（確実な同定に限る）。また，資料の探索には『資料日本動物史』を，種類の同定には『日本鳥名由来辞典』および『江戸鳥類大図鑑』を，適宜参照した。

5　用語・記号：往時の語「唐鳥」は外国産の鳥，同じく「類違……」は同類だが形態がやや異なることを示す。「通航一覧245」は『通航一覧』巻245の意味，（？）は，同定できない場合，引用文中の［　］は磯野による注あるいは補足である。

6　稿末に，「初出索引」を付した。

和暦	西暦	月日・事項（出典）
推古 6	598	●4 月，新羅より鵲（カササギ）2 羽を，難波吉士磐金（なにわのきしのいわかね）が持ち帰る（書紀）。
		●8・1，新羅，孔雀 1 羽を献上（書紀）。［注 1］
推古 7	599	●9・1，百済，駱駝（ラクダ）1・驢（ロバ）1・羊 2・白雉 1 を献上する（書紀）。ラクダはアジア原産のフタコブラクダの可能性が大だが，アフリカ原産のヒトコブラクダの可能性も残る。➡618，657，679［注 2］
推古26	618	●8・1，高句麗，駱駝 1 を献上（書紀）。
大化 3	647	●12月，新羅，孔雀 1・鸚鵡（オウム）1 を献上（書紀）。［注 3］
斉明 2	656	●百済より，西海使（遣百済使）が鸚鵡 1 を持ち帰る（書紀）。
斉明 3	657	●百済より，西海使が駱駝 1・驢（ロバ）2 を持ち帰る（書紀）。
天智10	671	●6 月，新羅，水牛 1・山鶏 1（？）を献上（書紀）。
天武 8	679	●10・17，新羅，馬・狗・騾（ラバ）・駱駝を献上（書紀）。
天武14	685	●5・26，新羅，馬 2・犬 3・鸚鵡 2・鵲（カササギ）2 を献上（書紀）。
朱鳥 1	686	●4・19，新羅，馬 1・騾（ラバ）1・犬 2 を献上（書紀）。
文武 4	700	●10・19，新羅より，佐伯宿禰（すくね）麻呂が孔雀を持ち帰る（続日本紀）。
養老 3	719	●⑦・7，新羅，騾（ラバ）牡牝を献上（続日本紀）。
天平 4	732	●5・19，新羅，鸚鵡 1・鴝鵒（クヨク）（ハッカチョウ）1・蜀狗（？）1・猟狗 1・驢（ロバ）2・騾（ラバ）2 を献上（続日本紀）。
天平17	745	●4・16，本日付の正倉院文書「園池司解」に「孔雀一羽日料，米二合五勺」とあり，天皇の庭園でクジャクが飼育されていたとわかる。
弘仁 9	818	●1・13，新羅が驢（ロバ）4 頭を献じたと，太宰府が通知（日本紀略）。
弘仁11	820	●5・4，新羅，羖羅羊（コレキヨウ）（多毛のヒツジ）2・白羊 4・山羊 1・鴈（ガチョウ）2 を献上（日本紀略）。
天長 1	824	●4・17，渤海国，契丹大狗 2・狻子（チン）2 を献上（日本紀略）。
承和14	847	●9・18，入唐僧の慧雲（えうん）が，孔雀 1・鸚鵡 3・狗 3 を献上（続日本後紀）。
寛平 1	889	●2・6，『宇多天皇御記』本日条に「大宰小弐が献じた猫」の記事がある。
延喜 3	903	●10・20，唐人，羊と白鴈を献上（日本紀略）。『扶桑略記』では11・20。
延喜 9	909	●11・27，大宰府が孔雀を献上（日本紀略）。
延喜19	919	●7・16，唐商，孔雀を献上（日本紀略）。
承平 4	934	●7・17，薩摩国，唐馬を献上（日本紀略）。
承平 5	935	●9 月，唐商，羊数頭を献上（日本紀略）。
天慶 1	938	●7・21，大宰府，唐商献上の羊 2 頭を進上（本朝世紀）。
長徳 2	996	●⑦・19，宋人，鴈鳥と羊を献上（日本紀略）。
長和 4	1015	●2・12，大宰大監藤原蔵規（まさのり）が鴈鳥 2・孔雀 1 を進上する（日本紀略）。
承暦 1	1077	●2・28，宋商が羊 2 頭を献上（扶桑略記）。『水左記』はヤギとする。

永保２　1082　●８・８，宋商が献上した鸚鵡を白河天皇が見る（百練抄）。

久安３　1147　●11・10，摂政藤原忠通､西海の荘園から贈られた孔雀と鸚鵡を，鳥羽法皇に献上（台記）。

久安４　1148　●３・27，仁和寺宮，杵島荘から贈られた孔雀を崇徳上皇に献上（史料綜覧）。

承安１　1171　●７・26，平清盛が羊５頭と麝１頭を後白河院の御所に連れてくる（百練抄）。「麝」がジャコウジカか，ジャコウネコかは不明。➡1226，1281

嘉禄２　1226　●２・７，藤原定家が「生麝」を見て「猫に似たり」と記す。おそらくジャコウネコ（明月記）。

弘安４　1281　●この頃成稿の『塵袋』に，「麝香ハ鹿ノタグヒト覚ルヲ，度々日本へ渡シタルハ，ミナ，ネコノ姿」とあり，ジャコウネコが何回か渡来していた。

応永15　1408　●６・22，若狭（わかさ）国に南蛮船が到着，象（インドゾウ）１・山馬（？）１・鸚鵡２対・孔雀２対を献上（後鑑）。応永18年，幕府は象を朝鮮国王に贈呈（李朝実録）。

応永23　1416　●５・22，伏見宮貞成親王，羊を初めて見る（看聞御記）。

応永29　1422　●４・17，禁裏が室町幕府から孔雀を借り出し，19日に返却（兼宣公記）。

享徳３　1454　●本年成稿の辞書『撮壌集』に「白鶻ハツカン」の語があり，ハッカンがすでに渡来していたことを示唆する。

文明４　1472　●９・23，大内教弘が明から取り寄せた水牛２頭のうち，１頭が上洛（後鑑）。

文明９　1477　●11・17，禁裏に水牛１頭が連れてこられ，後土御門天皇が見る（お湯殿）。

明応５　1496　●５・３，本日付の識語をもつ辞書『明応５年本節用集』に，「八々鳥ハハツチヤウ」（ハッカチョウ）が収録されている。➡732

文亀１　1501　●16世紀初頭に完成したとされる辞書，通称『文明本節用集』は「音呼インコ」「下鴨アヒル」「家猪ブタ」を収録。インコ・アヒル・ブタの初見。

文亀２　1502　●１・20，本日，明より堺に金魚が持ち渡られたと『金魚養玩草』は記すが，それを裏付ける同時代資料は発見されていない。➡1616

天文７　1538　●５・３，蜷川親順（にながわちかのぶ），細川氏に嶋鶫を献上する（親俊日記）。幕末まで「嶋鶫」（シマヒヨドリ）の名が使われたが，現種名はクロヒヨドリ。［注４］

●６・13，江州山徒が将軍足利義晴に嶋鶫を献じる（親俊日記）。６・20，将軍はそれを禁裏に献上（お湯殿）。

天文19　1550　●７・29，『多聞院日記』に「キンケヰ」という鳥を見たとの記事。「錦鶏」（キンケイ，金鶏とも）の初見。

天正３　1575　●明船が豊後臼杵（うすき）に到来し，大友宗麟に象１・虎４・鸚鵡などを贈る（長崎略史）。［注５］

天正14　1586　●６・23，山科言経，大坂城で飼われていた孔雀を見る（言経卿記）。

天正17　1589　●３・29，豊臣秀吉，見事な孔雀を禁裏に贈る（お湯殿）。

天正19　1591　●①・８，帰国した遣欧少年使節が秀吉にアラビア馬１頭を献上（岩生1980）。

文禄３　1594　●７月，堺の商人納屋（なや）助左衛門，ルソンで得た麝２匹を，秀吉に献上する（和漢三才図会）。北方系のジャコウジカではなく，ジャコウネコだろう。
●11月，平戸の松浦（まつら）道可（初世鎮信の父），孔雀を秀吉に献上（史料綜覧）。
●12月，吉川広家，朝鮮より生虎を秀吉に送る（史料綜覧）。

文禄４　1595　●４月，吉川広家，朝鮮より豹を秀吉に送る（史料綜覧）。生豹か皮かは不明。
●本年刊の『羅葡（ラポ）日辞典』に「トコムシ：cimex」とあるのはトコジラミ（床虱＝南京虫）。その侵入は幕末とされてきたが，南方との交流が頻繁だったこの頃，すでに日本へ入っていた。ただ，定着しなかったのだろうか。

慶長１　1596　●９・８，土佐にイスパニア船が漂着。秀吉，麝香10・猿15・鸚鵡２を同船より没収（通航一覧179）。麝香はジャコウネコか。➡1594
●朝鮮からの帰還者，高麗雉（コウライキジ）を持ち帰る（当代記）。

慶長２　1597　●７・24，ルソン総督が秀吉に贈った象が大坂に到着（日本王国記，鹿苑日録）し，29日に禁裏でお目見え，30日には京都の人々も見物する（左大史孝亮記）。
●８・４，大泥（パタン）国よりエンブ鳥１羽（？）とインコ２羽を献上（鹿苑日録）。

慶長３　1598　●島津義弘が朝鮮から牛馬（ウシウマ：小型馬）５頭を持ち帰る。種子島で繁殖させ，20世紀に及んだが，昭和21年（1946）に絶滅（薩摩博物学史）。
●日本では筑紫平野にだけ生息するカササギも，佐賀城主鍋島直茂または柳河城主立花宗茂が朝鮮からこの頃に持ち帰ったという（福岡県百科事典）。
●平戸藩主松浦鎮信（しげのぶ）（初世），朝鮮から持ち帰ったコウライキジを，平戸近辺の多久島に放す。少なくとも文政初年までは同島に存続（甲子夜話初編21）。

慶長６　1601　●５月，安南から徳川家康に孔雀の子５羽が贈られる（通航一覧171）。

慶長７　1602　●６・28，交趾（コーチン）（現ベトナム北部）から虎１・象１・孔雀２を家康に献上。家康はその象と虎を豊臣秀頼に贈った（通航一覧171，時慶卿記）。

慶長10　1605　●本年長崎で刊行のイエズス会宣教師編『日葡辞書』に「スイギュウ・ヒツジ・ヤギュウ［＝ヤギ，注６］・ロバ・アヒル・ガチョウ・クジャク・ハッカン・ハハチョウ［ハッカチョウ］」の渡来鳥獣名が収録されている。

慶長15　1610　●９・９，安南船が鸚鵡・孔雀・錦鶏各１羽を献上（実紀）。

慶長16　1611　●８・24，細川忠興，孔雀・豹を家康に献上（実紀）。

慶長17　1612　●８・28，蘭人，駿府で家康に泰吉了（サルカ）（キュウカンチョウ＝九官鳥）と駝鳥（ヒクイドリか，ダチョウか不明：➡1631）を献じる（実紀，当代記）。

慶長19　1614　●９・１，家康の外交顧問役ヤン・ヨーステン，江戸の若君に奉りたいとして，駿府で家康に虎の子２頭と鸚鵡１羽を献上（通航一覧240）。

元和１　1615　●⑥・９，平戸藩主松浦（まつら）隆信，高麗鵯を家康に献上。子孫の松浦静山は，嶋鵯ではないかという（甲子夜話続編94）。

元和２　1616　●５・16（英暦６・19），平戸英商館長コックス，明商から貰った金魚２匹を，懇願されて松浦隆信に与える（英館日記）。➡次項，1623

元和４　1618　●３・21（英暦４・６），平戸英商館長コックス，明商から贈られた金魚のうち１匹をふたたび松浦隆信に与える（英館日記）。➡前項

元和５　1619　●文禄３年（1594）から本年まで滞日したアビラ・ヒロンの『日本王国記』は，日本に綿羊はいないが，ヤギは少しいる，ガチョウとアヒルもいると記す。

元和９　1623　●元和年間（1615〜本年）に金魚が渡来（大和本草）。元和２年の記事のほか，「元和五年十月，外船納錦魚」（十三朝紀聞），「元和六年，朝鮮より金魚渡る」（武江年表）などの記録もあり，何回も持ち渡られたのだろう。➡1616

寛永８　1631　●１月刊の辞書『新刊多識編』に「駝鳥ヒクイドリ」とあり，これ以前のヒクイドリ渡来を示す。➡1612［注７］

●２・12，将軍家光，大僧正天海に孔雀１羽を下賜（実紀）。

寛永９　1632　●９・９，長崎奉行竹中采女正重義，インコ９と孔雀・鶴・毛長猫・麝香猫各１を献上（実紀）。

●９・15，平戸藩主松浦隆信，蘭館から得たインコ数羽を献上（蘭館日記）。

寛永10　1633　●２・４，対馬藩主宗義成（そうよしなり），家光に朝鮮鶴（？）を献上（史料綜覧）。

●９・24，長崎より，雀６（外国産小鳥か）・インコ３・猿１を献上（実紀）。

●12・４，平戸藩主松浦（まつら）隆信，犬・鸚鵡・洋馬・孔雀・猫を注文（蘭館日記）。

寛永11　1634　●３・28，蘭館献上のペルシア馬１頭・ロバ１頭，江戸に到着（蘭館日記）。

寛永12　1635　●９・21，平戸藩主松浦隆信が家光にインコと「かしわり」（＝カズワル＝ヒクイドリ）を献上（実紀）。ヒクイドリ生鳥のもっとも古い記録か。➡1631

●９・25，松浦隆信，オランダ東インド総督に贈物の礼状を記す。贈物のなかに風鳥（フウチョウ，剥製か）２羽がある（蘭館日記）。

寛永14　1637　●10・７，平戸新藩主松浦鎮信（しげのぶ）（二世）が犬・雉・インコ・鳩を献上（実紀）。

寛永15　1638　●４・５，江戸参府の蘭館長，ペルシア馬１・喜望峰産山鶉１を献上（実紀）。

寛永16　1639　●５・１，江戸参府の蘭館長，かるくん鳥（シチメンチョウ）雌雄と犬などを献上。かるくん鳥は尾張藩世子徳川光友に下賜（実紀，蘭館日記）。

●９・11，西尾藩主太田資宗が長崎より帰り，インコと砂糖鳥（サトウチョウ，インコの一種）を将軍家光に献上（実紀）。甘いものを好むのが名の由来。

●９・27，家光，加賀藩主前田光高に和蘭雉（？）を下賜（実紀）。

寛永18　1641　●12・21，江戸参府の蘭館長，金鶏１対・斑毛鶏１・はるしや鳥３・紅白インコ１対・鶴１対を献上（実紀）。キンケイ以外は種名がわからない。

寛永19　1642　●５・14，家光，紀伊藩世子の徳川光貞に，八重山蝙蝠（クビワオオコウモリ）を下賜（実紀）。

寛永20　1643　●寛永年間（1624〜本年）の作とされる静嘉堂蔵「四条河原遊楽図屏風」に豪猪（ヤマアラシ）の見世物が描かれている（近世風俗図譜５）。

正保１　1644　●３・16，家光，江戸城三の丸で孔雀の雛を見る（実紀）。すでに孔雀の繁殖に成功していたことがわかる。

正保３　1646　●12・１，江戸参府の蘭館長，白鸚鵡２・ヒクイドリ１・ラクダ２を献上（蘭館日記）。1000年ぶりで来たラクダは，翌正保４年２・18，松平万千代と松平三左衛門に下賜された（実紀）が，以後の消息は不明。➡599［注２］

正保４　1647　●４・14，清船がロバ２頭・水牛３頭を持ち渡る（蘭館日記）。

慶安１　1648　●10・６，蘭館，紀伊藩主徳川頼宣の注文した水牛２頭を同藩に渡す。頼宣はこれ以前にも水牛２頭を購入している（蘭館日記）。

慶安４　1651　●12・28，江戸参府の蘭館長，風鳥５羽（フウチョウ，剥製であろう）とインコ１羽を献上（実紀）。➡1635

承応１　1652　●11・19，『隔蓂記』本日条に，広橋兼賢邸で嶋鶫を見たと記す。➡1538

承応２　1653　●７・５，『隔蓂記』本日条に，広橋兼賢所持の珍禽として「八頭」「黒白斑の烏」を挙げる。前者はヤツガシラだが，後者はホシガラスか。

承応３　1654　●７・10，『蘭館日記』本日条に，津藩主藤堂高次にヒクイドリ２羽を渡す予定，７・14条には将軍にインコ２羽，津藩主にインコ５羽・リス３匹，加賀藩主にインコ１羽を売り渡すつもり……と記す。

明暦２　1656　●ジャコウネズミが長崎に侵入し，同地にて増える（通航一覧272）。➡1737

明暦３　1657　●１・15，江戸参府の蘭館長，石割鳥（ヒクイドリ）を献上（通航一覧242）。

万治１　1658　●１・15，江戸参府の蘭館長，「ほうよろすてれいす」（ダチョウ）１羽を献上する（松田1987，実紀）。江戸時代でダチョウが来た唯一の例だが，５カ月後に江戸城で死んだ。［注８］

●３・14，福岡藩主黒田光之，白鸛（ハッカン）１羽を献上（実紀）。

●４月，江戸堺町で，孔雀・鸚鵡・インコの見世物（松平大和守日記）。

万治２　1659　●２・28，江戸参府の蘭館長，べんがら牛２頭を献上（通航一覧242）。

万治３　1660　●３・４，長崎奉行甲斐庄喜右衛門，ロバと九官鳥を献上（実紀）。

●３・12，村上藩主松平直矩，チンを貰う（松平大和守日記）。小型犬の初来は古い（➡824）が，改良により現在のチンが現れたのは江戸時代らしい。

寛文２　1662　●３・26，薩摩藩主島津光久，鸚鵡と音呼を献上（実紀）。

寛文６　1666　●９・８，津藩主藤堂高次，石割（ヒクイドリ）と九官鳥を献上（実紀）。

●11・３，村上藩主松平直矩，江戸で九官鳥と「ちやうせう鳩」（チョウショウバト＝長生鳩）を鳥屋から取り寄せる（松平大和守日記）。

寛文７　1667　●３・15，村上藩主松平直矩，長崎伊予屋から，風鳥を一つ購入（松平大和守日記）。剥製だろうが，蘭品を扱う店でそのような品も入手できたのである。

●５・12，狩野常信がヘキチョウを写生（鳥写生図巻）。［注９］

●８・18，清船，徳川光圀注文の猿３・麝香猫３を将来（唐通事会所日録）。

寛文８　1668　●２・28，江戸参府の蘭館長，ペルシア馬の牡２頭を献上。この２頭と在来種の牝のあいだに子が生まれた（岩生1980・30〜31頁）。

寛文11　1671　●６・24，狩野常信が江戸城飼育のヤツガシラを写生（鳥写生図巻）。

寛文12　1672　●寛文年間（1661～本年）の作「江戸堺町葺屋町小芝居絵巻」に，孔雀見世物の風景が描かれている（見世物研究）。
●寛文年間に，清よりセイラン（青鸞）雄が渡る（博物舘禽譜）。

延宝１　1673　●本年大坂に持ち込まれたインコが100両余で取り引きされた（摂陽奇観）。

延宝３　1675　●６・19，幕府の無人島（小笠原諸島）探検隊が品川に帰着，オガサワラオオコウモリ・メグロ・オガサワラハシブトゴイ・オガサワラマシコ（後２種はのち絶滅）のほか，セイケイらしい鳥を持ち帰る（通航一覧・附録12，甲子夜話初編21）。狩野常信は上記メグロをスケッチ（鳥写生図巻）。[注10]
●道頓堀で孔雀・鸚鵡・唐鳥の見世物（見世物研究）。

延宝４　1676　●３・15，江戸参府の蘭館長，ロバ２頭を献上（通航一覧242）。
●５・８，狩野常信，グルマインコを写生（鳥写生図巻）。

延宝６　1678　●２・15，江戸参府の蘭館長，風鳥３羽（剥製か）を献上（通航一覧242）。
●３・１，対馬藩，藩外持ち出し禁制品を定めるが，その一つに「朝鮮おし鳥」がある（長崎県史２）。後の用法ではカンムリツクシガモを指す名なので，この珍種がすでに朝鮮から対馬へ持ち込まれていた可能性がある。

延宝７　1679　●12・17，狩野常信，死んだオニカッコウを写生（鳥写生図巻）。海外から持ち渡られたのか，迷鳥が捕獲されたか不明だが，日本で唯一の記録である。

延宝８　1680　●10・24，狩野常信がアカヒゲ雌雄を写生（鳥写生図巻）。

貞享２　1685　●７月，犬猫を繋ぐことを禁止。生類憐み令の発端で，以後動物の飼育が厳しく制約される（磯野1997）が，その間にも長崎には鳥獣が持ちこまれていた。

元禄４　1691　●９・６，狩野常信，ヤイロチョウを写生（鳥写生図巻）。

元禄10　1697　●６月刊行の『本朝食鑑』には，錦波羅（キンパラ）・黄鳥（コウライウグイス）・山鵲（サンジャク）・鷓鴣（シャコ類）・南京鳩（？）・文鳥（ブンチョウ）・紅雀（ベニスズメ）・烏骨鶏（ウコツケイ）・唐麻呂（トウマル）・チャボ・シャモが持ち渡られている，風鳥（オオフウチョウとヒヨクドリ，剥製か）が載来されたことがある，長生鳩や文鳥は繁殖にも成功しているなどと記す。

元禄13　1700　●12・６，徳川光圀没。光圀は孔雀・青鸞（セイラン）・白鸛・鵲（カササギ）・鸚鵡・音呼（インコ）類・金鶏・鴛鳥・嶋鶫・八々鳥・高麗雉・てうせう鳩（長生鳩）・紅雀・吐綬鶏（シチメンチョウ？）・豪猪（ヤマアラシ）・羊・尾長猿・霊猫（ジャコウネコ）・ロバ・ブタなどを飼育していた（桃源遺事）。

宝永２　1705　●８・23，清船，錫鶏（？）１羽を持ち渡る（唐通事会所日録）。

宝永３　1706　●７・28，清船，錦鶏２羽を持ち渡る（唐通事会所日録）。

宝永４　1707　●本年清船が持ち渡った鳥は，鶴１・孔雀２・インコ１（唐通事会所日録）。

宝永５　1708　●５・28，清船，錦鶏３・竹鶏１を将来。本年，ほかに孔雀・インコ・画眉鳥（ガビチョウ）各１も持ち渡る（唐通事会所日録）。

宝永６　1709　●１・20，生類憐み令撤廃（実紀），鳥獣虫魚の売買・飼育も元に復する。

●3・20，清船，インコ・画眉鳥（ガビチョウ）・金雀鳥（カナリア）各1を将来。この年，ほかに相思鳥（ソウシチョウ）2・錦鶏（キンケイ）4・八哥鳥（ハッカチョウ）1・告天鳥（コウテンシ：ヒバリの類）1も来る（唐通事会所日録）。

●8月，本月刊の『大和本草』は，中国原産の反毛鶏（サカゲ）を記載。

宝永7　1710　●8・7，清船，孔雀1羽を持ち渡る（唐通事会所日録）。

●⑧・26，錦鶏7・青鸚哥（インコ）2・相思鳥2・画眉鳥3・八哥鳥1を，清船から買い上げる。（唐通事会所日録）。

●9・10，黄鳥（コウライウグイス）と山鵲（サンジャク）を明年持ち渡るように，高木作右衛門［注11］が清商に命じる（唐通事会所日録）。

●9・25，高木作右衛門，錦鶏・相思鳥（ソウシチョウ）・画眉鳥・孔雀・砂糖鳥（サトウチョウ）の出所と飼育法を清商に尋ねる（唐通事会所日録）。

●12・24，狩野常信が江戸城に飼われていた文鳥を描く（鳥写生図巻）。

正徳1　1711　●8月，本月成稿した『愛禽徒然草』は，孔雀鳩・しやむろ鳩（？）・長生鳩・南京鳩などを挙げ，白鸝・嶋鶫・文鳥が繁殖していることにも触れる。

正徳2　1712　●3・3，狩野常信が江戸城に飼われていた紅雀を描く（鳥写生図巻）。

正徳3　1713　●本年刊の『和漢三才図会』に，金魚は筑前と堺で多数飼育されていること，豚は長崎と江戸で飼われているが，近年は少ないなどの記事がある。

正徳5　1715　●6・3，清より斑鳩（ジュズカケバトか，シラコバト）2羽来る（唐通事会所日録）。

享保2　1717　●7月，生類見世物の禁が本年解除されたので，京都四条河原で孔雀・鸚鵡・錦鶏・音呼（インコ）の見世物。久々の見世物は大当たり（月堂見聞集）。

●11・15，この日の奥書がある『諸禽万益集』は，唐鳥として，「金鳩・ちうせう鳩［長生鳩］・だんどく・かなあり・十四まつ［＝十姉妹，注12］・ぶんちよう・ひいんこう［緋インコ］・あふむ・八ツ頭・金鶏・はつかん・がてう［鴛鳥］・花鴨［？］・くじやく・から国［からくん？］・だてう［ダチョウ＝ヒクイドリ］・らんけい［蘭鶏］」の17品を挙げる。

●12月，高麗雉と錦鶏の雌雄を伊豆大島に放つ。翌年・翌々年も両種を放鳥するが，すべて行方不明となる。また，大島で当時200頭にも増えていた羊（じつはヤギ）を，この年2頭捕らえて幕府に献上（伊豆大島志考）。

●蘭より，将軍御用の猟犬2匹来る（斎藤1936）。

享保3　1718　●6月，幕府，唐馬の持ち渡りを清商に密命する（大庭1980，p.197）。清からの牛馬持ち出しは国禁だった。

●幕府，火食鳥2羽・猟犬2匹を蘭館に注文（長崎洋学史）。

享保5　1720　●2・11，清商，享保3年の密命により唐馬2頭を持ち渡る（通航一覧199）。

●7・22，蘭船が，前年注文された火食鳥2羽と猟犬2匹を持ち渡るが，火食

鳥１羽は死ぬ（長崎洋学史）。➡1718

享保６　1721　●幕府，猟犬６匹（牡２，牝４）を蘭館に注文（長崎洋学史）。

享保７　1722　●幕府，猟犬を蘭館に注文（長崎洋学史）。

享保８　1723　●９月，幕府，洋馬（牡３，牝２）を蘭館に注文（通航一覧245）。

●12月，清商が唐馬３頭（牡１，牝２）を持ち渡る（通航一覧199）。

享保９　1724　●２・４，対馬藩，カンムリツクシガモ（鴛鴦）雌雄を幕府に献上。幕府が享保６年に始めた朝鮮薬材調査の一環として，対馬藩が同７年に朝鮮で入手し，前年に幕府から献上を命じられていた（田代1999，大雲院公実録）。このカモは朝鮮付近に生息していたらしく，以後幕末までに何回か渡来し，また国内でも迷鳥として捕獲されているが，20世紀前半に絶滅したらしい。

●５・17，「鳩喚と云鳥，今日御所へ来る」（槐記）。鳩喚は九官鳥。

享保10　1725　●６・14，蘭船が牡馬５頭（ペルシア馬３，ジャワ馬２），孔雀２・鷲２・青インコ１・紅インコ１・紅雀４・文鳥７・狆（チン）１・中犬２・狩犬の子１を持ち渡る（通航一覧245）。

●11・８，清船が唐犬４匹を持ち渡る（和漢寄文４）。

享保11　1726　●２・28，清船，七星魚（タイワンドジョウ）を持ち渡る（随観写真）。

●５月，清商に唐犬数匹を注文，続いて８月にも注文（和漢寄文４）。

●６・21，蘭船が洋馬５頭（牡３，牝２）と麝香猫２匹を携え来るが，麝香猫のうち１匹は航海中に死ぬ（長崎洋学史）。

●12月，幕府，清船主呉子明に象の持ち渡りを命じる（通航一覧175）。

享保12　1727　●２・21，長崎奉行献上のムスクリアトカツトウを江戸隅田村御前栽場（鳥獣飼育場）に放つが，６月頃行方不明となる（御場御用留）。「面犬のごとく，形猫のごとく，尻尾并身のしなひはイタチのごとく，立歩行人のごとく，大さ猫に似たり。よく鼠と蛇とを取食」（通航一覧240）。マングースか。

●６・３，蘭船が牡馬２頭を持ち渡る（斎藤1922）。

●９月，蘭船将来の黒毛鶏５羽を普請奉行稲葉多宮に預ける（通航一覧240）。

●清船，浙江産竹鶏（コジュケイ）雄を将来（外国産鳥之図）。［注13］

●房州の嶺岡牧に白牛３頭（乳牛牝２，牡１）を放牧。繁殖は成功し，寛政４年（1792）には70余頭にも達した（白牛酪考）。

享保13　1728　●６・13，広南（現ベトナム）からインドゾウ牡１頭（７歳）と牝１頭（５歳）が持ち渡られる。享保11年の注文によるものだったが，牝は９・11に長崎で死に，牡だけが翌年江戸へ送られる（通航一覧175，享保日記）。

●６・19，蘭船，麝香猫２匹を持ち渡る（長崎洋学史）。

●幕府，蘭館に馬数頭と猟犬３匹を注文（長崎洋学史，岩生1980）。

享保14　1729　●１・19，隅田村御前栽場（➡1727）に高麗雉３羽（雄２，雌１）を放つ。本月は別の日にも，４羽を放す（御場御用留）。

●3・13，前年渡来した牡の子象，長崎を出発して江戸に向かう。象使い2人・清人の通訳2人も同行，4・28には京都御所で中御門天皇と霊元法皇が象を見物，5・25江戸に到着して浜御殿に入り，5・27に将軍吉宗が上覧した。この象は寛保2年（1742）に死ぬまで江戸に留まった。[注14]

●7・2，蘭船，ペルシア牝馬2・孔雀2・唐犬1・洋犬1を持ち渡る（通航一覧245，斎藤1922）。

●11・15，対馬藩，鴛鴦（カンムリツクシガモ）雌雄1対を幕府に献上（大雲院公実録）。➡1724

享保15　1730　●2・28，江戸参府の蘭館長，さとう鳥2羽を献上（通航一覧242）。

●6・29，蘭船，ペルシア馬2頭（牡1・牝1）を持ち渡る（斎藤1922）。

●6・30，象を希望者に引き渡す旨を触れる（通航一覧176）。20名ほど応募したが，適切な者はおらず，浜御殿で飼い続ける（豊芥子日記）。

●11・7，蘭船将来のペルシア馬牡牝・からくん鳥（シチメンチョウ）・弁柄（ベンガラ）鳩（ベニジュズカケバト）・ムスクリヤアトカツト（マングース？➡1727）それぞれ雌雄が，江戸城に到着した（享保日記）。

享保16　1731　●6・6，隅田村御前栽場（➡1727）に，竹鶏を放つ。翌17年2月にも2羽を放つが，いずれも死んだり行方不明になった（御場御用留）。

享保17　1732　●3・22，清船，尾長雉の雄3羽を将来。享保15年注文の分（外国産鳥之図）。

●秋，備中・備後で犬に狂犬病が流行，翌年も関西で流行（月堂見聞集）。洋犬が持ち込んだといわれ，10年ほどで東北まで拡がった。

●蘭館に猟犬3匹を注文（長崎洋学史）。

享保18　1733　●4月，江戸両国回向院の城州嵯峨釈迦如来開帳の際，本所一ツ目御石置場で象を見世物とする。中野村源助・柏木村弥兵衛・押立村平右衛門が，浜御殿から象を拝借した（享保撰要類集・生類，甲子夜話3編10）。➡1741

●7・25，清船が尾長雉の雌1羽を将来。8・18に死ぬ（外国産鳥之図）。

享保19　1734　●2・28，江戸参府の蘭館長，狆（チン）1匹を献上（実紀）。

●6・29，蘭船が，牡馬6頭と馬車を載来する（斎藤1922）。

●7・15，幕医丹羽（にわ）正伯，江戸城で八哥鳥（ハッカチョウ）・竹鶏（コジュケイ）・黄鳥（コウライウグイス）を拝見（九淵遺珠）。

●7・23，江戸城から幕医丹羽正伯に異鳥の嘴が届けられ，正伯は見解を記して吉宗に差し出す（九淵遺珠）。図から，サイチョウ（犀鳥）の嘴とわかる。

●8月，宝永4年（1707）以来蘭船が次の鳥類を持ち渡ったと，長崎から幕府に報告（阿蘭陀人日本渡海発端）――孔雀・駄鳥（ヒクイドリ）・鸚鵡・鳩喚（キュウカンチョウ）・音呼（インコ）・文鳥・長生鳩・金鳩・音鳩（「クルウンドイフ」＝カンムリバト）・弁柄鳩（ベニジュズカケバト）・咬嚼吧（ジャガタラ）鳩（カノコバト？）・からくん（シチメンチョウ）・ひいちい（ピイチイ＝コシジロヒヨド

リかコウラウン）・砂糖鳥（サトウチョウ）・まるてんちい（各種のムクドリ類）・鵞鳥・ばるけん（バリケン）・かなありや・碧鳥（ヘキチョウ）・十姉妹・弁柄雀（「紅雀とも云」）・孔雀鳩・暹羅鳩（？）・白鳩・阿蘭陀本国鳩（食用ドバト）・鶏・家鴨（アヒル）。

享保20　1735　●3月，江戸城で飼われていた鴛鴦（カンムリツクシガモ）が卵を産み，アヒルに抱卵させたところ，3羽が孵化した（九淵遺珠）。

●③・1，江戸参府の蘭館長，九官鳥を献上（通航一覧243）。

●③・21，清船が蝋嘴鳥（コイカル）と相思鳥を将来，本日その図を長崎奉行に渡す（外国産鳥之図）。

●11月，長崎奉行窪田肥前守，清産の鷦鴒（シャコ）・瑤禽（ヨウキン）（カケスの類）・八哥鳥・狆を幕府に送る（承寛襍録）。

●享保年間，ハリネズミ生品が朝鮮より渡来（本草図説）。➡1809

●享保年間，蛮船（おそらく蘭船）がペンギンの皮を持ち渡り，のち田村藍水が入手したと子息栗本丹洲が記した文が『堀田禽譜』に残る。➡1820

●享保年間，翠鵲（紺瑤禽（コンヨウキン），ルリカケス），琉球より渡来。安永年間には1羽75両もしたが，その後多く渡り廉価になった（飼籠鳥）。

元文1　1736　●4月，幕府，長崎より砂糖鳥2羽と青鸞（セイラン）1羽を取り寄せる（承寛襍録）。

●6・5，江戸城吹上御苑に吉宗の供をした人が，からくん（シチメンチョウ）・孔雀の雛・竹鶏を目にしている（半日閑話19）。

●7・6，蘭船が馬3頭（牡2・牝1）を持ち渡る（長崎志）。

●清船，ハイイロコクジャクを持ち渡る（博物舘禽譜）。

●元文初年，高麗雉を下総稲毛辺に放ち，繁殖させる（日東本草図纂）。

元文2　1737　●2・28，江戸参府の蘭館長，きうくわん鳥（九官鳥）2羽・猟犬1匹を献上する（通航一覧243）。

●7・13，江戸滝野川近辺に高麗雉と白雉を放す（実紀）。

●7・15，蘭船，牡馬2頭を将来。享保10年（1725）から本年までに蘭船が持ち渡った馬は27頭（牡21・牝6）となる（斎藤1922）。

●8・7，清船が青鶏（セイケイ）を持ち渡り，本日その図を長崎奉行に提出する（外国産鳥之図）。本種はクイナの類で，きわめて美しい。

●9・8，本日幕府に提出された『薩州産物絵図帳・春夏』中の「こうね」（香鼠か）はジャコウネズミ。おそらく，琉球から薩摩へ侵入。➡1656

元文5　1740　●6・28，清船がタイマイ（玳瑁）生品1匹を持ち渡る（通航一覧264）。

寛保1　1741　●4・27，享保14年（1729）以来浜御殿で飼われていた象が，この日から中野村の源助所持の土地に移り，源助と淀橋水車弥兵衛が管理する（享保撰要類集・生類，豊芥子日記，承寛襍録）。➡次年

寛保2　1742　●6・28，カンボジア船が孔雀1対・火鶏（シマハッカン）1対・山鶏4対・

タイマイ４匹を持ち渡る（通航一覧264，外国産鳥之図）。

●12・12，前年中野村に移った象が本日死ぬ（享保撰要類集・生類）。

寛延１　1748　●冬，『金魚養玩草』刊。金魚についての最初の刊本であり，ランチュウ（卵虫魚）がすでに渡来していることもわかる。

宝暦１　1751　●６・９，本日，「ランチウノ子」を写生（異魚図纂）。この頃描かれた『衆鱗図』にもランチュウ成魚の図がいくつもあり，この品種が広まり始めていることが明らか。➡前項

宝暦６　1756　●『華蛮交易治聞記』巻３に「宝暦六年頃」として禽類24品・獣類３品の元値が記録されている。たとえば，キウクハン（九官鳥）300目，孔雀120目，紅音呼78匁，青音呼78匁，からくん（シチメンチョウ）58匁５分，砂糖鳥45匁，八哥鳥（ハッカチョウ）37匁５分，カナアリヤ鳥37匁５分，鸚鵡32匁５分，紅雀15匁，十姉妹13匁，文鳥７匁８分，栗鼠15匁，狆犬65匁など（磯野1998）。

宝暦８　1758　●夏，大坂道頓堀で珍鳥の見世物。猩々音呼・青音呼・色音呼・達磨音呼・黄鳥（コウライウグイス）・鸚鵡・錦鶏・島鶫（クロヒヨドリのシマヒヨドリ型，注４）の８品で，大当たり。高槻藩主永井直行侯の愛禽を，没後に譲り受けたという。同じく夏に京都洛北今宮で，晩秋には江戸で興行（摂陽奇観，物類彙考，半日閑話）。［注15］

●本年田村藍水が長崎で，蘭船中にいたサソリ生品を入手（物類品隲）。

●本年描かれたらしいモンシロチョウの図が細川重賢著『昆虫肖化図』にある。同じ頃の作である伊藤若冲画『芍薬群蝶図』にも，モンシロチョウが描かれている。この頃までに本種が大陸から侵入していたらしい（小西1993，1994）。

宝暦９　1759　●大坂と江戸で孔雀の見世物（摂陽奇観，見世物研究）。

宝暦12　1762　●３・13，会津若松の七日町で唐鳥の見世物：猩々音呼・錦鶏・嶋からす（？）・七色音呼など（若松興行見聞）。

●７・22，蘭船，ジャワ馬の牡２頭を持ち渡る（長崎志）。

●清船，画眉鳥・十姉妹（ジュウシマツ）・黄麗鳥（コウライウグイス）を持ち渡る（海舶来禽図彙説）。

宝暦13　1763　●４・８，本日より会津若松の中二ノ町で孔雀の見世物（若松興行見聞）。

●白頭鳥（クビワムクドリ）渡来（鳥類絵）。

明和２　1765　●９・18，将軍家治，ペルシア馬の種馬３頭を蘭館に注文（岩生1980）。

●生きた鯪鯉（センザンコウ），京都で見世物（重修本草綱目啓蒙・増補）。

明和３　1766　●７・８，蘭船，ズグロゴシキセイガイインコ（頭黒五色青海音呼）を持ち渡る（鳥類絵）。

●朝鮮目白（チョウセンメジロ）の繁殖に成功する（百千鳥）。

明和４　1767　●清船，鷓鴣（コモンシャコ）・白頭翁（シロガシラ）・竹鶏（コジュケイ）を持ち渡る（海舶来禽図彙説）。

明和 5　1768　●6・25，蘭船，ペルシア産牡馬 1 頭を将来。以後，明和 8 年まで毎年牡馬を持ち渡る（通航一覧245）。計 7 頭。

明和 6　1769　●7・4／7・7，蘭船，ペルシア馬牡 2 頭を持ち渡る（通航一覧245）。

●清船，白鸚（ハッカン）を持ち渡る（海舶来禽図彙説）。

明和 7　1770　●8 月，『堀田禽譜』に「明和七年庚寅八月始見之」として「ピイニス」（コウヨウジャク＝紅葉雀）の図がある。

明和 8　1771　●明和末年，秋月侯江戸屋敷で九官鳥の繁殖に初めて成功（飼籠鳥）。

安永 1　1772　●7 月，会津若松の左下リ観音開帳で，錦鶏や五色鳥（五色音呼？）などの見世物（若松興行見聞）。

●8・4，薩摩藩主島津重豪（しげひで），蘭館から購入した豪猪（ヤマアラシ）2 匹のうち，1 匹を老中田沼意次（おきつぐ）に進呈（半日閑話）。➡次項

●12・29，幕臣の博物家田村藍水が，幕府からヤマアラシ 1 匹を拝領（田村公用日記）。おそらく，前項で田沼に贈られた個体。➡1775

安永 2　1773　●春より夏，ヤマアラシ 1 匹，浪華道頓堀で見世物（摂陽奇観）。➡1777

●6・6，御所に孔雀・鸚鵡・唖々鳥（ハッカチョウ）などを召し出し，後桃園天皇が内々で見物（続史愚抄）。四条河原辺の見世物を呼び寄せたか。

●7 月，本月刊の『[唐鳥秘伝] 百千鳥』は外国産鳥類65品だけの飼育書で，江戸時代の出版では唯一の例。本年表での既出品以外に，じゃがたら雀（シマキンパラ），白子鳩（シラコバト）などを記す。キンケイやシチメンチョウが繁殖していたこと，カナリアやセイケイはまだ珍しかったことなどもわかる。

安永 4　1775　●3 月，田村藍水，長崎の大通詞吉雄耕牛から譲られた綿羊牡牝を受け取る。代金22両だが，牝は本年12月に病死（田村公用日記）。

●6 月，清船がインコ 4・ハッカチョウ 6・斑鳩（ジュズカケバトか，シラコバト）1 を持ち渡る（瓊浦偶筆）。

●田村藍水，自家のヤマアラシを浅草寺境内で見せる。ただし，丸薬を買った客にだけという（武江年表，譚海32）。➡1772

安永 6　1777　●8・9，京都でヤマアラシの見世物（続史愚抄）。月日不明だが，本年名古屋七ツ寺で見世物になったヤマアラシもこの個体か（名陽見聞図会・3 上）。

安永 7　1778　●3・15，会津若松の大町で孔雀の見世物（若松興行見聞）。

●7・17／7・20，蘭船がペルシア馬牡 2 頭とヒクイドリを持ち渡る（長崎志続編，万国管闚）。馬の輸入は以後途絶えた。

●9・8，三浦梅園が長崎代官高木作右衛門宅で，尾長雉・白鸚・駄鳥（ヒクイドリ）・文鳥・相思鳥・インコ・喜雀（カササギ）・十姉妹などと，ペルシア馬 2 頭が飼われているのを見る。（帰山録草稿）。➡次項

●9・23，三浦梅園，大通詞吉雄耕牛宅を訪れ，猿に似た「ろやある」を見る（帰山録草稿）。これは「ロイアールト」（原猿のスローロリス）。➡1833

安永 8　1779　●2・1，木村蒹葭堂，大坂で駝鳥（ヒクイドリ）を見物（蒹葭堂日記）。見世物ではなく，長崎から江戸に送られる道中の個体らしい。➡次項
●3・6，江戸参府の蘭館長，駝鳥（ヒクイドリ）を献上（佐竹曙山写生帖）。

安永 9　1780　●体長 2 尺の生きた鼉児（ワニの子）が長崎に渡来（万国管闚）。
●安永年間，琉球から海和尚（カケスの一亜種）が将来（堀田禽譜）。
●安永・天明年間，「琉金」（リュウキン：琉球金魚の意）が琉球から薩摩に渡る（日本の金魚）。

天明 1　1781　●栗本丹洲編『鳥巣獣類魚品石貝之写生』に「天明丑年［本年］紅毛人イギリスより買い来るカイマン［ワニ］……但し寅年［2 年］に斃す。丑年には長三尺許，寅年には五尺許」とあり，図は吉雄家にあったという。前年の「鼉児」は，おそらくこのワニであろう。種名のカイマンは中南米産だが，この文での「カイマン」はワニ一般を指す語として使われている。➡1800
●鷓鴣（コモンシャコ）が薩摩より初めて江戸に来る（禽鏡 3）。➡1767

天明 2　1782　●4 月，四条河原で白鸛（ハッカン）の見世物（本草綱目会識）。

天明 6　1786　●駝鳥（ヒクイドリ）1 羽，幕府に献上される（内安録）。
●将軍徳川家治の治世（1760〜本年）に青鶏（セイケイ）4 羽が献上され，生き残った 2 羽が江戸城吹上御苑で飼われていた。また，突厥雀（サケイ）が舶来したという（堀田禽譜）。

天明 7　1787　●1・14，田村西湖（藍水の子），駄鳥皮 1 羽分を拝領（田村公用日記）。江戸城吹上御苑に飼われていて，前年の暮に斃れたというので，前々項の個体か。
●6・24，蘭船，山嵐（ジャワヤマアラシ）・類違からくん（カンムリバト）・弁柄鷺（カササギサイチョウ）・カアブス鳥（ギンパラ）を将来（唐蘭船）。

天明 8　1788　●3・9，江戸参府の蘭館長，「ヤールホーゴル」（カササギサイチョウ）の若鳥とサイチョウ（犀鳥）の嘴を献上（蘭山禽譜）。「蘭医……風鳥三四羽を載来」（観文禽譜）とあるフウチョウ（剥製）献上も，このときか。［注16］
●5・27，江戸躋寿館の薬品会に田村西湖が「エメウ」，じつはヒクイドリの剥製を出品（白井年表）。これは前年 1 月に拝領した駄鳥皮と思われる。
●天明年間，蘭人がカナリアを初めて雌雄で持ち渡り，出島で飼って子を育てた。その親鳥を長崎奉行が貰い受けて江戸に持ち帰った。それまで雄だけが渡来していたので増やせなかったが，こうして以後は国内でも繁殖が盛んになったのである（鳥賞案子）。
●天明年間，「かあぷすかなありや」［注17］・類違十姉妹（セイコウチョウ＝青紅鳥）・本国鳩（食用ドバト）・タチアヒルが蘭船により載来，告天子（コウテンシ）・珍花鳥（シキチョウ＝四喜鳥）が琉球から持ち渡られた（鳥賞案子，堀田禽譜）。

寛政 1　1789　●5・27，江戸躋寿館薬品会に薩摩侯島津重豪が記年鳥（サイチョウ）の嘴を

出品（蘭畹摘芳筆録本・次編３）。

●⑥・９／⑥・11，このときの蘭船が将来した鳥獣類の元値が『寛政元酉歳紅毛直組帳』に残る（成澤1993A）。１羽の値と持込数は：孔雀（140匁，８羽），類違からくん（カンムリバト？，250匁，12羽），駝鳥（ヒクイドリ，120匁，１羽），カナアリヤ（38匁，11羽），紅雀（17匁５分，14羽），文鳥（７匁５分，377羽），砂糖鳥（50匁，18羽），長生鳩（２匁８分，６羽），尾長猿（70匁，３匹）。➡1756

●夏，清国福州から紅羅雲（コウラウン）が来る（蘭山禽譜）。

●青鶏（セイケイ）が渡来（水谷禽譜）。

寛政２　1790　●５月，前年渡来したヒクイドリが大坂で見世物となる（蒹葭堂雑録）。のち，京都・名古屋に廻る（水谷禽譜）。

●夏，シキチョウが琉球から渡来（堀田禽譜，蘭山禽譜）。

●夏，清船が海和尚（カケスの一亜種）を持ち渡る（蘭山禽譜）。➡1780

●夏，紺瑶琴（ルリカケス）が載来する（芳斎禽譜摘要）。➡1735

寛政３　1791　●８・12，会津若松の桂林寺町後ノ分で「だてう」（ヒクイドリ）の見世物が始まる。９・１に柳津，９・13に坪下杖に廻る（若松興行見聞）。

●金沢の卯辰八幡で駝鳥の見世物（屋漏堂禽譜），江戸堺町河岸でも興行（武江年表）。前々年渡来の鳥が各地を巡っているらしい。➡前年，次年

寛政４　1792　●３月，伊勢神宮に近い地蔵街で駝鳥の見世物（成澤1998）。

●７・８，蘭船がオランウータン１匹とロバ牡牝を持ち渡るが，オランウータンは長崎で死ぬ（唐蘭船，一話一言）。➡1800

●水野忠通長崎奉行時代（天明６年～本年）に蘭人が持ち渡るという風鳥剥製２点の図が『渡辺派鳥類図巻』にあり，コフウチョウの成鳥と幼鳥らしい。

寛政５　1793　●７・５，蘭船，ロバを持ち渡る（博物館獣譜）。

寛政６　1794　●７・５，蘭船，麝香猫２匹を将来。寛政２年に注文したもので，うち１匹はコジャコウネコ（唐蘭船）。

●清船持ち渡りの麝香猫１匹を幕医多紀元徳が購入して飼育し，３年後に死んだという（本草綱目纂疏13）。

寛政７　1795　●３月，本月刊の『西遊記』の巻５に，「広島の城下……ぶた多し。……肥ふくれて色黒く……長崎にもあれども，すくなし」と記す。

●６・６，蘭船が「コローンホーゲル」（カンムリバト）を持ち渡る（桃洞遺筆）。

●９月，薩摩侯島津重豪，琉球から渡来した紅羅雲（コウラウン）と珍花鳥（シキチョウ）を献上（観文禽譜，堀田禽譜）。

●大坂から江戸に「朝鮮むく」（カラムクドリ）が来る（堀田禽譜）。

寛政９　1797　●８月下旬～10月上旬，尾張の大須でカンムリバトの見世物（水谷禽譜）。

寛政11　1799　●冬，蝦夷で捕えた白熊を江戸に送る（東夷物産志稿）。ホッキョクグマか，

ヒグマの白変かは不明。

●清船，三呼鳥（ハイイロミカドバト）を持ち渡る（堀田禽譜）。

寛政12　1800　●5・25，蘭船がオランウータンと「シユリカツト」（サラワクスンダリス）を持ち渡るが，オランウータンは長崎で死ぬ（唐蘭船）。➡1792

●8・16，長崎通詞吉雄耕牛，没。『通航一覧』245は「享和年中，耕牛が蘭館を通して四尺のワニを取り寄せて飼育する」旨を記すが，享和は耕牛の没後である。天明初年にワニを飼った事実がある（➡1781）ので，その誤伝か。

●9月，本月刊行の『長崎聞見録』に，「獅子頭金魚」（オランダシシガシラ）の図がある。普通の金魚の100倍の値だという。

●寛政年間にはシチメンチョウを飼っているのを江戸でよく見かけたが，その後は絶えた（禽鏡3）。

享和1　1801　●4・8，大田南畝，大坂四天王寺参詣の帰途に孔雀茶屋に立ち寄る。錦鶏・白鸚・灰鶴・孔雀5羽・高麗雉と羊がいた（芦の若葉）。孔雀茶屋は客寄せに珍鳥を置く店で，寛政年間に出現し，江戸は上野や浅草，京都は祇園，名古屋は若宮八幡や末広町にあった。花鳥＝美鳥の意で，花鳥茶屋とも呼ばれた。

●夏，京都で舶来のバザル獣，別名ベゾアルの見世物。羊に似て，体高三尺余，総身淡黒色，角は鉄のごとく三段に巻揚がる。享和3年には紀三井寺で見世物となる（本草余纂）。刷物の絵を見ると，ヤギの一品種か（宗田1994）。

享和2　1802　●10月，本月付の奥書をもつ『鳥賞案子（ちょうしょうあんし）』は薩摩藩御鳥方比野勘六の著作で，全300余品のうち唐鳥は約100品に達し，来歴や飼育法に詳しい。尺八鳩（ズアカアオバト）や牛鳩（カラスバト）も記されている。［注18］

享和3　1803　●7・8，アメリカ船が長崎に入港，フタコブラクダ1と水牛2・ロバ2を持ち渡る。幕府は受け取らずに米船を退去させるが，ラクダの絵だけは数カ所に残っている（蘭館日記，甲子夜話初編8）。

文化1　1804　●6・5，前年清商が持ち渡った鱧魚（七星魚，タイワンドジョウ）のうち，生き残った7匹を長崎奉行が将軍家斉の観覧に供する（桃洞遺筆4）。

●11・30，清船が相思鳥7・画眉鳥1・竹鶏1・山和尚（カケスの類）1を将来（長崎表御用会計私記）。

文化2　1805　●6月，江戸麹町の鳥屋にいた黄梅鳥（こうばい）（ズグロチャキンチョウ）の図が『堀田禽譜』にある。

●清船，竹鶏（コジュケイ）を持ち渡る（長崎渡来鳥獣図巻）。

文化3　1806　●4・12，栗本丹洲が江戸城で「唐かけす」（カケス）を写生（堀田禽譜）。

●6・22／6・27，蘭船，ヒクイドリと風鳥の剥製を持ち渡る（水谷禽譜）。この風鳥はシロカザリフウチョウ（渡辺派鳥類図巻）。

文化4　1807　●6・18／6・26，蘭船がシルバールトン（オナガザル類）を将来（唐蘭船）。

●11・1，大田南畝，姫路侯の江戸屋敷で火食鳥を見る（一話一言17）。

文化５　1808　●夏，佐藤成裕が『飼籠鳥』の自序を記す。全416品のうち約100品が唐鳥。
●清船が百霊鳥（コウテンシ＝告天子）を持ち渡る（長崎渡来鳥獣図巻）。

文化６　1809　●６・18，蘭船が類人猿のワウワウテナガザルを将来（唐蘭船）。➡本年10月
●７月，名古屋大須で，白牛・青インコ・紫インコ（大紫）・あふむ鳥（鸚鵡）の見世物（猿猴庵文化日記）。
●10月頃，大坂で「猴」（ワウワウテナガザル）の見世物（摂津名所図会大成）が出る。11月には和歌山へ移り，一里山庚申堂境内で見世物（桃洞遺筆４）。
●清船，蝟（ハリネズミ）を持ち渡る（唐蘭船）。➡1735，1811

文化７　1810　●４月，名古屋でワウワウテナガザルの見世物（猿猴庵文化日記）。➡前年

文化８　1811　●５・３，栗本丹洲，蘭人持ち渡りの紅風鳥剥製を観る。記述からヒヨクドリ（比翼鳥）らしい（磯野2000）。➡1697
●ハリネズミ，江戸へ送る途中で死ぬ（磯野2000）。➡1809

文化９　1812　●７月，清船，砂糖鳥４羽を持ち渡る。本年４月にも同品が来た（唐蘭船）。
●12月，清船，沈香鳥（ギンパラ）２羽を持ち渡る（唐蘭船）。➡1787

文化10　1813　●６・28，長崎にイギリス船が入港，象（インドゾウ，牝５歳）・山猫（マレージャコウネコ）・大紫音呼（オオハナインコ）雌・猩々音呼（ヒインコ）・五色音呼（オトメズグロインコ）を持ち渡る（唐蘭船）。『豊芥子（ほうかいし）日記』には，紅雀３・千鳥１・長生鳩３・緋音呼４・青音呼１・鸚鵡４・山猫１・猿１・象１・ケレツフハーン（ヒメウズラ）１を積載とある。日本側は象を受け取らずに返した（蘭館日記）が，図はかなりの数が残っている。[注19]
●８・16，清船，猩々音呼（ルイチガイショウジョウインコ）と青海音呼（ズグロゴシキセイガイインコ）を持ち渡る（唐蘭船）。

文化11　1814　●６・23，イギリス船が，麝香猫（ジャワジャコウネコ）・錦鳩（キンバト）・五色紅音呼（アカクサインコ）・鸚鵡（コバタン）を持ち渡る（唐蘭船）。

文化12　1815　●９月，名古屋大須で「寒号虫」の芸を見せる（猿猴庵文化日記）。寒号虫は南西諸島に産する八重山蝙蝠（クビワオオコウモリ）らしい。➡1642
●12・27，下田に漂着した清船は，沈香鳥（ギンパラ？）42羽・倒掛鳥（サトウチョウ）５羽・相思鳥（ソウシチョウ）17羽を積んでいた（清舶筆話）。
●清船が紅音呼（ルイチガイショウジョウインコ）２羽を将来する（唐蘭船）。

文化13　1816　●春，江戸で山猫の見世物。文化10年渡来のマレージャコウネコ（本草図説）。
●11月，名古屋で麝香猫の見世物（猿猴庵文化日記）。前項と同じ見世物か。
●清船，鸚鵡（コバタン）と洋八歌（ギンムクドリ）を持ち渡る（唐蘭船）。

文化14　1817　●６月，『奇鳥生写図』の本月写し終わった部分に，珊瑚鳥（タイカンチョウ＝大官鳥）の図がある。
●清船，青音呼（キボウシインコ）を持ち渡る（唐蘭船）。
●幕医渋江長伯の建言で，幕府は長崎奉行に命じて清から綿羊を取り寄せ，長

伯が管轄していた巣鴨御薬園で飼育する。のち，300余頭に増え，年々剪毛して浜御殿御薬園や吹上御殿で絨布を織らせた（宗田1992）。

文政 1　1818　●清船，紅音呼（ヤクシャインコ）・紅音呼（ルイチガイショウジョウインコ）・黄鳥（コウライウグイス）・檀香鳥（シマノジコ）・十姉妹（シマキンパラ）を持ち渡る（唐蘭船）。

文政 2　1819　●6・11／6・26，蘭船がポルポラアト鳥（ホロホロチョウ）3とスマトラ産尾長猿（シルバールトンか）8を持ち渡る（唐蘭船，博物舘獣譜）。[注20]

●清船，綬雀（コシジロミツスイ）・認宅鳥（アトリ）を将来する（唐蘭船）。

文政 3　1820　●6・15，蘭船がペンギンの皮を持参（蘭畹摘芳筆録本 3 編 8）。➡1735

●6月，清船，四祝鳥（シキチョウ）と翠花鳥（ミナミヤイロチョウ）を持ち渡る（唐蘭船）。

●清船，小形類違紅音呼（アオスジヒインコ）・類違紅音呼（ヤクシャインコ）を持ち渡る（唐蘭船）。

文政 4　1821　●7・1，蘭船が献上品として駱駝（ヒトコブラクダ）牝牡を持参したが，幕府は受け取らず，文政 6 年 2 月まで出島に置かれた（唐蘭船，長崎志続編）。

●8・26，尾張の大須で唐鳥の見世物が始まる。「鉄はら青いんこ尾長・朱はし［嘴］だるまいんこ・獅子いんこ・頭黒五色いんこ・キウクワン鳥［九官鳥］・五色いんこ・朱はし青いんこ・わび鳥［画眉鳥？］・かささぎ・こんよふ鳥［紺瑠禽＝ルリカケスか］・ヲランダ白狸［？］」と豪華な顔ぶれだった（見世物雑志）。しかし，図も無く，大半は種類が特定できない。

文政 5　1822　●6・12，蘭船，ポルポラアト鳥（ホロホロチョウ）雌雄を将来（唐蘭船）。『長崎渡来鳥獣図巻』に「卵……大概二十八日程には産し候。則三ヶ月程，相立候略図」の注記付きの雛鳥図があるので，繁殖にも成功していた。➡1819

●6・16，清船，山鵲（サンジャク）と黄鳥（コウライウグイス）を持ち渡る（渡辺派鳥類図巻）。

●10月，箱館亀田村の近く一本木の古堀で，カンムリツクシガモ雌雄を捕獲，翌年秋に将軍家に献上（堀田禽譜，水禽譜）。

文政 6　1823　●2月，文政 4 年渡来のヒトコブラクダが民間に引き渡され（長崎志続編），まず九州・四国で興行し，7月には大坂で見世物となる（見世物研究）。

●3月，大坂難波新地で，黒猿の見世物（摂陽奇観）。文政 2 年渡来の猿か。

●7・12，大坂難波新地で，ラクダの見世物が始まる。しかし，札銭24文が高かったからか，意外に不入りで，9月には京都に移る（摂陽奇観）。

●9・19，京都上京四条道場でラクダの興行開始。ついで奈良へ（摂陽奇観）。

●11・14，尾張大須門前で，黒猿の見世物（猿猴庵文政日記）。同時に赤いんこ・青いんこ・紺瑠禽も出る（見世物雑志）。➡本年 3 月

文政 7　1824　●春，駱駝が南紀で興行（摂陽奇観）。ついで木曾路を経て江戸へ。

●⑧・６，ヒトコブラクダ牡牝，江戸に到着し，同月９日から両国広小路で興行を始める。32文の札銭にもかかわらず，連日観客が殺到し，興行は日延べに日延べを重ねて，翌春まで続く（我衣18，見世物研究）。

文政８　1825　●７・２／７・７，蘭船がヒクイドリを将来（唐蘭船）。

文政９　1826　●３月下旬，筑前の見世物に出た「虎の子」は山猫（山猫図説）。図と計測値から判断すると，ツシマヤマネコと思われる。

●10月，陸亀（セマルハコガメ）を清の福州から琉球へ持ち渡る（本草図説）。

●11・11，尾張の大須でラクダの見世物が始まる。前年春に江戸の興行を終えた後，東国・越前・加賀などを廻り，本年岐阜を経て尾張に入る。尾張の後は三河・遠江で興行（絵本駱駝具誌，猿猴庵文政日記）。

●清船，寿鶏鳥（ベニジュケイ）雄１羽と黄頭青音呼（オオキボウシインコ）を持ち渡る。翠花鳥（ヤイロチョウ）の清船持ち込みも本年らしい（唐蘭船）。

文政10　1827　●４月，岩国にラクダが来る（岩国市史）。

●５月，ラクダ牡牝，大坂難波で見世物。ついで北国に向かうが，この後天保４年（1833）までの足跡は不明（摂陽奇観，見世物研究）。

●12月，朝鮮より対馬経由で豹の子牝２頭が長崎に来て，翌年見世物となる（唐蘭船，柳庵随筆７）。

●清船，紅音呼（コムラサキインコ）を将来（唐蘭船）。

文政11　1828　●５月，筑後の柳川で，豹の見世物（博物館獣譜）。➡前年12月，本年12月

●６・26，蘭船が碧鳥（ヘキチョウ）を持ち渡る（唐蘭船）。

●12・11，豹１頭，平戸へ来る。本年，２頭が筑州・肥州・長崎と興行したのち，加島で１頭が死に，一度対馬に戻ってから，平戸へ再来して興行。ついで小倉へ向かったという（甲子夜話続編22）。

文政12　1829　●清船，類違碧鳥（コウラウン）を持ち渡る（唐蘭船）。

天保１　1830　●春，鳥屋の越前屋彦四郎が西尾侯に，鷭麗鳥を持参（堀田禽譜）。『日本鳥名由来辞典』はアカメカラスモドキ，『江戸鳥類大図鑑』はオオルリチョウと同定している。

●４・８，本日より尾張大須の清寿院で，豹の見世物。この前に京都・大坂でも興行したらしい。６月に伊勢に行くが，７月に松坂で人に噛み付き，殺された（見世物雑志，桃洞遺筆６）。文政11年に平戸へ再来した豹と思われる。

●６・20，蘭船がピルポタート（コモンシャコ雌）を持ち渡るが，数日後に死ぬ（唐蘭船）。

天保２　1831　●６・29，蘭一番船が麝香猫（マレージャコウネコ）牡１・小形青音呼５を将来。６・30，蘭二番船が小形鸚鵡１・長生鳩８・弁柄鳩３を将来（唐蘭船，成澤1993B）。

●夏，長崎に虎２頭が来るが，受け取らず（物産宝庫乙１）。

●12月，堀田正敦著の通称『堀田禽譜』が完成（長岡・田中1994）。本書は江戸時代最大最高の鳥類図説であり，多数の渡来種も載せる。本年表既出品以外に，リュウキュウガモ・カンムリヒバリ・ヒメコウテンシ・ヒゲガラ・ソデグロムクドリ・クリチャヒワ（かあぷす鳥）・コシジロヒヨドリ・ベニバト・レンジャクバト・オナガバト・タイハクオウム・オオバタン（オウム類）・ズグロインコ・ショウジョウインコ・ルイチガイヒインコなどがある。

天保３　1832　●７・20，蘭船が山あらし（ジャワヤマアラシ）・類違音呼（ヨウム）・コロンホーゲル（カンムリバト）を持ち渡る（唐蘭船）。

●８月，尾張藩で，綿羊を希望者に与えると通達（名陽見聞図会初編下）。

天保４　1833　●３月，大坂難波新地でヤマアラシの見世物（摂陽奇観）。前年渡来の個体か。

●春末，江戸両国広小路で，ラクダ１頭の見世物（文政10年５月以降の足取りは不明）。５・３から７日間は信州飯田の専照寺で興行，６・１には甲州路をまた江戸に向かい，８月に江戸市谷八幡で見世物となった（巷街贅説）。「牝尾張にて死す。牡浪花難波村に両三年居けるが，是も死せり」（鍾奇遺筆１）というから，本項のラクダは生き残りの牡だが，以後の消息は伝わらない。

●６・６，蘭船が，小形鹿（ジャワマメジカ）１頭・ロイアールト（原猿のスローロリス）１匹・ヲンベケンデテイル（ハクビシン）１匹を持ち渡る（唐蘭船）。『甲子夜話』続編97によると，以上のほかにも，麝香猫５匹・音呼10羽・十姉妹６篭・鳩２篭・エイキホールン（リス類）１匹・黒猿２匹・鸚鵡８羽・文鳥４篭・猿６匹・九官の類，と多様多数の動物が持ち込まれた。また，年不明だが，鹿の一種キョンもこの前後に将来されたらしい（唐蘭船）。

天保５　1834　●５・13，尾張大須山門外で，豪猪（ヤマアラシ）・秦吉了（キュウカンチョウ）・鸚鵡の見世物（見世物雑志）。豪猪は前々年渡来の個体か。

●７・１，蘭船，テンポンチイ（ミフウズラ）雌と類違大鼻音呼（オオハナインコモドキ）を持ち渡る（唐蘭船）。麝香猫も来たらしい（甲子夜話３編12）。

天保６　1835　●６・28，蘭船，コロブレチース鳥（キンカチョウ）を持ち渡る（唐蘭船）。

天保７　1836　●５月，江戸浅草奥山で，朝鮮渡りのロバの見世物（白井年表）。

●６・12，蘭船，ヒクイドリを将来（見世物雑志）。➡次年､1838･２月・６月

●長崎御用物役高木作右衛門忠篤，八哥鳥（ハッカチョウ）２羽・赤い嘴の倒臥鳥（シュバシサトウチョウ）５対を蘭館に注文。忠篤は天保６年にも倒臥鳥（サトウチョウ）10対を注文している（大森1976）。

天保８　1837　●９月，ヒクイドリ，尾張で見世物に出る。前年渡来の個体（見世物雑志）。

●11月，長崎奉行戸川播磨守安清，長崎より江戸にカイマン（ワニ）の乾燥標本２体を持参。大は２丈，小は２尺ほど。ほかに「レギユアヽン」という黄縞のあるトカゲ（生品？，乾品？）も持ち帰る（鳥獣図）。

●清船，類違音呼（キムネゴシキセイガイインコ＝黄胸五色青海インコ）と類

違音呼（アオスジヒインコ＝青筋緋インコ）を持ち渡る。値は前者が銀800目，後者は銀１貫500目で，幕府はともに不要と返答（唐蘭船）。

天保９　1838　●２月，江戸西両国で駝鳥（ヒクイドリ）の見世物（見世物研究姉妹編・見世物版画年表）。➡1836，1837，本年６月，1840

●６月，京都京極でヒクイドリの見世物（錦窠禽譜22，百品考２下）。

天保10　1839　●６・24，蘭船，紅雀（ベニスズメ）雄５・雌３を持ち渡る（唐蘭船）。

●冬，清船，和春鳥（クロウタドリ＝黒歌鳥）を将来（長崎渡来鳥獣図巻）。

天保11　1840　●秋，京都京極の善良寺でヒクイドリの見世物（重修本草綱目啓蒙・増補）。

天保12　1841　●３・28，江戸浅草寺で観世音の開帳が始まり，境内奥山でのロバの見世物が大当たりとなる（武江年表，見世物研究）。

天保14　1843　●７・９，蘭船，モルモット牡牝を持ち渡る（唐蘭船）。牝は長崎で死ぬが，牡は幕府御用となって，９・26に長崎を出発し，江戸に向かう（唐蘭船，続泰平年表，百品考２下）。三毛の愛玩用品種だったので人気があったらしく，翌年も将来されて江戸城御用となる。➡次項

弘化１　1844　●６・16，蘭船がモルモットを持ち渡る。12月，モルモット２対が江戸城に到着。道中で牝２匹とも出産したが，親子とも健在（朝暾聞見１）。子は計12匹（紫藤園獣譜）。11・23，１匹を払下げるとの触れが出る（天保雑記）。➡前項

●清船，寿鶏鳥（ベニジュケイ）雄を持ち渡る（唐蘭船）。

弘化３　1846　●４月，大坂難波新地観場で「虎ノ子・灰白鸚鵡［ヨウム？］・猩々音呼ノ頭黒キモノ［ズグロインコの類？］・相思鳥・砂糖鳥」の見世物（随意雑識４）。虎ノ子は山猫（ツシマヤマネコ？）かもしれない。➡1826，1851

●清船，七星魚（タイワンドジョウ）を持ち渡る（唐蘭船）。

弘化４　1847　●４・１，京都の山本読書室に文鳥の「雄」が飛来，１月後には「雌」も来る（百品考２下・瑞紅鳥）。外国産の鳥がすでに野生化していた事例の一つ。

●清船，小紫音呼（ヤクシャインコ）を持ち渡る（唐蘭船）。

嘉永１　1848　●清船，嶋鶫（クロヒヨドリのシマヒヨドリ型）１羽を持ち渡る（唐蘭船）。➡次項，次々項，注４

嘉永２　1849　●清船，珊瑚鳥（ムジチメドリ）と嶋鶫各１羽を持ち渡る（唐蘭船）。

嘉永３　1850　●７月，清船，洋八歌鳥（ギンムクドリ）と黄鳥（コウライウグイス）を持ち渡る。本年はこのほか，嶋鶫５羽（クロヒヨドリ型４，シマヒヨドリ型１）が来た（唐蘭船）。［注４］

嘉永４　1851　●10・９，本日より，江戸西両国広小路で生虎の見世物。じつは対馬深山で捕らえた山猫というから，ツシマヤマネコか（藤岡屋日記・珍説）。

嘉永５　1852　●１月，清船が紅遁鳥（ダルマエナガ）１羽を持ち渡る（唐蘭船）。

万延１　1860　●７・11，「豹，渡来。吹上に於て［将軍］御覧あり」，体長４尺余，９カ月の子。同月下旬から，両国橋西詰で見世物（武江年表）。開国により，以後いろ

いろな動物が到来し，見世物に出る。

●12・17，本日，博物画家関根雲停が川村壱岐守の庭園で朝鮮ヲシドリ，一名リキウカモ（カンムリツクシガモ）を写生（博物舘禽譜）。➡1724，1868

文久 1　1861　●6・16，関根雲停が「亜墨利加産ハルミ・桐花鳳」(ハチドリ類）を写生（博物舘禽譜)。剥製か。

●10・14，本日より江戸麹町13丁目裏の福寿院境内で虎の見世物。秋に渡来した個体で，体長は 5 尺余。その後，橋場（現白鬚橋辺）に移る（武江年表)。

文久 2　1862　●3・27，領土権確立と開拓のため前年12月に小笠原諸島へ渡った幕府派遣隊の一部が，この日，オガサワラオオコウモリ（小笠原大蝙蝠，母島で捕獲）を携えて江戸に戻る（磯野1994)。

●春，大坂難波新地で，豹の見世物。万延元年 7 月に江戸で興行を始めてから何処を廻ったかは不明（見世物研究)。

●伊勢松坂竜泉寺で，虎の見世物（本草写生図譜)。前年秋渡来の虎か。

文久 3　1863　●1・2，本日より，江戸両国橋西詰でフタコブラクダの見世物（磯野1995)。4 月には浅草奥山で見せる（見世物研究)。

●春，インドゾウ牝 1 頭（3 歳）が横浜に渡来，3 月上旬から江戸両国広小路で見世物，大当たり（歌川芳豊錦絵ほか)。

元治 1　1864　●6・20，出羽松山藩家老の松森胤保が江戸浅草奥山の鳥屋を訪れ，ハッカンとカササギを売っていたと記す。7・10に同店を再訪したところ，チョウショウバト・キンケイ・クジャク・オウム・青インコ・朝鮮目白がいた。別の鳥屋では，ベニスズメ・ジュウシマツ・ブンチョウ・コウライキジ・尾長インコ・シチメンチョウ，小笠原産と称する大蝙蝠などを見かけている（遊覧記)。

●9・18，松森胤保，江戸向島の牛島神社辺で虎の見世物を見る（遊覧記)。文久元年に渡来した虎が各地を廻ったのち江戸に再来したらしい。

慶応 1　1865　●1・18，松森胤保，江戸浅草奥山の鳥屋を再訪，新たにアカヒゲ・ガチョウ・銀鳩（ジュズカケバトの白変)・孔雀鳩がいた。5・15，江戸を離れた日の夜に野田（現さいたま市・野田）で一泊した際，シラコバトが一晩中やかましいと記す（遊覧記)。現在も越谷付近にはシラコバトが生息し，江戸時代に輸入され，鷹の獲物として放鳥されたものの子孫といわれる。

●4 月，伊勢国古市（伊勢市の東南）で象の見世物（本草写生図譜)。ただし，5 月14日，神域であることを理由に禁止された（維新史料綱要)。

●8・3，『慶応漫録』本日条に，最近ライオンが持ち渡られ，横浜居留地に飼われていると記す。『枳園叢攷』9・16日条によると，これは牝で体長 4 尺ほど。前日江戸へ運ばれ，16日には浅草金龍山で見世物に出たが，仏域で肉餌を与えるのは許せないとして翌17日には禁止された。➡次項

慶応 2　1866　●1 月，江戸芝白金の清正公廟前でライオン牝の見世物（白井年表)。➡前項

●４月，大坂難波で象の見世物（本草写生図譜）。➡1863，1865

慶応３　1867　●３月，大坂難波新地でフタコブラクダの見世物（本草写生図譜）。➡1863

●６・26，ナポレオン３世より贈呈されたアラビア馬26頭（牡11，牝15）を，江戸城で受領（馬事年史）。

●10月，パリ万国博覧会に出席していた田中芳男が帰国，ホロホロチョウを持ち帰る（田中芳男君の経歴談）。➡1819，1822

明治１　1868　●12・19，出羽松山藩家老松森胤保（➡1864）の『日記』本日条によれば，江戸浅草奥山の鳥屋を覗くと，数年前（➡1864，1865）には見かけなかった新顔に，「金鳩・頭黒（ズグロ）インコ・緋インコ・画眉鳥・タイコン鳥［タイカンチョウ］・白頭（シロガシラ）・相思鳥・沙糖鳥［サトウチョウ］」と，見慣れない鴨がいた。翌明治２年４月，この鳥屋を再訪すると，その鴨がいたので名を尋ねると「リキウ鳧（カモ）」とのこと（➡1860）。胤保は，この鴨を写生して自著『大泉諸鳥写真画譜附録』に残したが，これはカンムリツクシガモであり，現在では絶滅した本種が市販もされていたことを示す唯一の記録である。➡1724［注21］

注記

（１）絵図から判断すると，幕末までに日本へ持ち込まれた孔雀の大半はマクジャクである（日本鳥名由来辞典）。

（２）正倉院御物に描かれているのはフタコブラクダだが，中国で出土した唐三彩の陶俑にはヒトコブラクダが見られる。したがって，図や詳しい記述がが無い場合には，そのいずれかは決められない。

（３）古代から15世紀頃までは，「鸚鵡」のうちにインコも含んでいた可能性が大きい。

（４）嶋鶫は現種名クロヒヨドリ。本種には頭の黒いクロヒヨドリ型と，頭の白いシマヒヨドリ型があるが，図あるいは詳しい記述がないと，どちらか特定しがたい。したがって，特定できる場合はいずれの型かを記し，それ以外は単に「嶋鶫」とした。

（５）「天正２年（1574），明船が博多に来て，象・虎を持ち渡る」と記す書があるが，その出典は不明である。内容が本項の記事とよく似るので，その誤伝と思われる。

（６）『日葡辞書』に「Yaguiu：野ノ牛（Nono vxi），牡山羊または牝山羊」とあるのはヤギである。当時の日本では，なぜかヤギに「野牛」の語を充て，音読みで「ヤギュウ」と発音したらしい。その「ヤギュウ」が訛って「ヤギ」となった。

（７）江戸時代の「駝鳥」は，万治元年（1658）の１例を除いてダチョウではなく，みなヒクイドリだった。この間違いは『本草綱目』の誤りに由来する。

（８）このダチョウの図が高知市山内神社に残る。また，ダチョウの現蘭名はstruis-vogelだが，当時はvogelstruisとも呼び，それが「ほうよろすとれいす」となった（松田1987）。

（９）狩野常信は幕府御用絵師，江戸木挽町狩野家２世。その『鳥写生図巻』（東京国立博物館蔵）は寛文４年（1664）から正徳２年（1712）にわたる鳥類のスケッチを収め，江戸城

や幕府関係者宅で飼われていた鳥が多い（磯野2003）。

(10) 現在の小笠原諸島にはセイケイは生息していないが，漂流者や延宝３年の探査記録から，当時セイケイの類がいたことは確実である（磯野1997，鈴木2002〜04）。

(11) 長崎の高木家は，寛文２年（1662）に３代作右衛門宗能のとき御用物役になり，清船・蘭船が持ち渡った物品や鳥獣を管理し，また図を含めた詳細を幕府に通報することになる。元文４年（1739）以降は代官も兼ね，幕末にいたる。代々，作右衛門を名乗る。

(12) 現在の十姉妹（ジュウシマツ）は，コシジロキンパラから江戸時代の日本で作られたが，当時の十姉妹図を見るとジュウシマツ・ダンドク（コシジロキンパラの一亜種）・シマキンパラなどの場合がある。したがって，特定できる場合以外は原記載名「十姉妹」だけを記した。なお，「十姉妹」の語は，中国に由来するようである。

(13) 竹鶏は図や記載からコジュケイの場合が多いが，なかに別種の例も存在する。したがって，図や詳細な記載を欠く場合はコジュケイとせずに，原記載の「竹鶏」のままにした。

(14) 象の行程は一部しか判明していない：３・13長崎発，14矢上泊……21下関……４・６広島通過……18兵庫泊，19尼崎泊，20大坂着，24大坂発・枚方泊，25伏見泊，26京都着，28天皇・法皇に拝謁，29京都発・草津泊……５・４清須泊，５名古屋通過……14箱根着（箱根は３日間逗留の予定だったが，発病して出発延期），19箱根発……23川崎泊，24品川泊，25江戸着（山下1972，吉長公御代記，月堂見聞集，金府紀較抄，御用象御賄諸入用小帳，大田区史資料編・平川家文書１）。

(15) インコに関しては，赤っぽい種類は「紅音呼」，多色ならば「五色音呼」……のように大雑把に呼ばれていたから，本稿では図を伴う場合を除き，原記載名だけを記した。

(16) 江戸時代に持ち込まれたと判明している風鳥（剥製）は，オオフウチョウ，コフウチョウ，カンザシフウチョウ，シロカザリフウチョウ，ヒヨクドリ（日本鳥名由来辞典，江戸鳥類大図鑑，内田康夫氏私信）。

(17)「かあぷすかなありや」を『日本鳥名由来辞典』はキマユカナリア，『江戸鳥類大図鑑』はオオカナリアとする。いずれにしてもカナリアに近い種類。

(18)『鳥賞案子（ちょうしょうあんし）』は異題が多く，鳥養草・鳥名集・鳥はかせ・飼鳥必用・養禽物語など，全部で10以上の異名同本があるので，注意を要する。➡磯野（1992）

(19) ナポレオン戦争のため，1810年にオランダはフランス領となる。1811年にはイギリスがジャワを占領，ついで長崎の蘭館奪取を意図してイギリス船が文化10年（1813）と次年に派遣されたのである。ジャワがオランダに返還されたのは，講和成立後の1816年。

(20)『博物舘図譜』にある文政２年渡来のシルバールトン図は，『唐蘭船持渡鳥獣之図』中の文化４年渡来のシルバールトン図と瓜二つである。じつは，大名などから長崎に問い合わせがあった場合，かならずしも実物の絵を送るのではなく，すでに描かれている絵を写して使うこともあったらしい。たとえば，『甲子夜話』３編12巻にある「天保五年渡来麝香猫図」は，著者平戸藩主松浦静山が長崎から取り寄せたらしいが，これは『唐蘭船持渡鳥獣之図』にある寛政６年渡来の麝香猫図の転写図である。前記文政２年渡来シル

バールトン図もこのような転写図と思われる。

(21) 松森胤保の「日記」（松森家蔵）から，カンムリツクシガモに関連する部分を採録――

明治元年（1868）「十二月十九日　昼より出，浅草奥山鳥屋江行て見に，一体鳥数は不足なれども，色々珍鳥あり。人もなく静なれば，図を取，金壱朱呉て帰。其数，左の如し――高麗雉　別品小雉　金鳩　頭黒インコ　［空白］鴨　緋インコ　画眉鳥　眉白（マミジロ）　タイコン鳥　コク丸烏　白頭（シロガシラ）　相思鳥　嶋頬白　沙糖鳥　等の類也」（下略）

明治２年（1869）「四月十二日　……　奥山江参……鳥屋に行けれども，別物なし。おし［オシドリ］の大成（おおきなる）よふなる鳧（カモ）［カンムリツクシガモ］はリキウ鳧といへり」

文献：略号で示した文献，絵画資料，明治以降の出版物・報文を中心とし，『国書総目録』『国史大辞典』『国文学複製翻刻書目総覧』などで所在や，翻刻本・影印本を調べられる資料の大半は省略した。略称を用いた資料は➡の後に正式名を記した。⇨は「次書に所収」の意，「：」の後は関連文献などを記した。「東博」は東京国立博物館の略，「日吉紀要」は『慶應義塾大学日吉紀要・自然科学』の略。なお，国会図書館蔵鳥類書の大部分は磯野（1992）に概略を記してある。

愛禽徒然草，瑞翁，国会図書館蔵：磯野（2001）参照
維新史料綱要，維新史料編纂会編
伊豆大島志考，立木猛治，同刊行会
英館日記➡イギリス商館長日記，東大資料編纂所編・発行
江戸鳥類大図鑑，鈴木道男編著，平凡社：『堀田禽譜』『観文禽譜』に基く
絵本駱駝具誌，高力猿猴庵，神戸市立博物舘蔵
猿猴庵文化日記，高力猿猴庵 ⇨ 日本庶民生活史料集成 9 , 三一書房
猿猴庵文政日記，高力猿猴庵 ⇨ 日本都市生活史料集成 4，学習研究社
大泉諸鳥写真画譜附録，松森胤保，松森家蔵：磯野・内田（1989）を参照
屋漏堂禽譜，坂 元慎 ⇨ 屋漏堂花譜，坂 元慎，岩瀬文庫蔵
お湯殿➡お湯殿の上の日記，続群書類従，補遺 3，続群書類従完成会
阿蘭陀人日本渡海発端 ⇨ 続海事史料叢書，第 1 巻，成山堂書店
外国産鳥之図，国会図書館蔵：磯野・内田（1992）を参照
華蛮交易治聞記，東京大学総合図書館蔵
寛政元酉歳紅毛直組帳，神戸市立博物舘蔵：磯野・内田（1992）に収録
観文禽譜，堀田正敦，東博・国会図書館など蔵：図ナシ。『江戸鳥類大図鑑』を参照
枳園叢攷，森 立之，国会図書館蔵
帰山録草稿，三浦梅園 ⇨ 三浦梅園集，岩波文庫
九淵遺珠，丹羽正伯，杏雨書屋・岩瀬文庫蔵：磯野直秀，『九淵遺珠』，日吉紀要，17号
享保日記，西野清八郎 ⇨ 随筆百花苑15，中央公論社

近世風俗図譜 5 ：四条河原，小学館
御用象御賄諸入用帳，箱根町立郷土資料館蔵
昆虫胥化図，細川重賢，永青文庫蔵：小西（1993，1994）を参照
左大史孝亮記 ⇨ 改定史籍集覧，第25冊，臨川書店
佐竹曙山写生帖 ⇨ 佐竹曙山・増山雪斎（江戸名作画帖全集 8 ：博物画譜），駸々堂
薩摩博物学史，上野益三，島津出版会
実紀➡徳川実紀，新訂増補国史大系，吉川弘文館
衆鱗図，松平頼恭編，松平公益会蔵・香川県歴史博物舘保管：影印本➡香川県歴史博物舘友の会／東海大学出版会（内容は同一）
承寛襍録➡諸留書，内閣文庫蔵
書紀➡日本書紀，新訂増補国史大系，吉川弘文館
白井年表➡［改訂増補］日本博物学年表，白井光太郎，大岡山書店
資料日本動物史，梶島孝雄，八坂書房：事例や出典を知るのに役立つ
随意雑識，岩永文禎，杏雨書屋蔵
水禽譜，著編者未詳，国会図書館蔵
大雲院公実録 ⇨ 宗氏実録 2 ，清文堂出版
田中芳男君の経歴談 ⇨ 東京国立博物館百年史・資料編，東京国立博物館編刊
田村公用日記➡田村藍水・西湖公用日記，続群書類従完成会
鳥獣図，著編者未詳，東博蔵
鳥巣獣類魚品石貝之写生，栗本丹洲，杏雨書屋蔵
朝暾聞見，貴志忠美，岩瀬文庫蔵
鳥類絵，著者未詳，長崎県立図書館蔵：渡来鳥類の図譜，長崎御用絵師の控図？
東夷物産志稿，土岐新甫？ ⇨ 採薬志 － 1 ，科学書院
唐蘭船➡唐蘭船持渡鳥獣之図，慶應義塾図書館蔵：磯野・内田（1992）参照
鳥写生図巻，狩野常信画，東博蔵：磯野（2003）を参照
長崎表御用会計私記，大田南畝 ⇨ 大田南畝全集17，岩波書店
長崎県史・史料編 2 ，吉川弘文館
長崎志・同続編➡長崎実録大成・続長崎実録大成（長崎文献叢書 2 ， 4 ），長崎文献社
長崎渡来鳥獣図巻，東博蔵
長崎洋学史，古賀十二郎，長崎文献社
長崎略史，金井俊行 ⇨ 長崎叢書・下，長崎市役所
日葡辞書➡邦訳日葡辞書，土井忠生ほか編訳／索引日葡辞書索引，森田 武，岩波書店
日本王国記，アビラ・ヒロン，大航海時代叢書11，岩波書店
日本鳥名由来辞典，菅原 浩・柿澤亮三，柏書房
日本の金魚，松井佳一，アルス文化叢書37，アルス
博物舘禽譜，博物局編，東博蔵：磯野直秀，東京国立博物館『博物舘図譜』について，日吉紀

要，12号
博物舘獣譜，博物局編，東博蔵：前項磯野報文を参照
馬事年史，大友源九郎，日本競馬会
物産宝庫・乙集，田中芳男，東京大学総合図書館蔵
芳斎禽譜摘要，著者未詳，東洋文庫
堀田禽譜（通称）➡禽譜，堀田正敦，東博・宮城県図書館蔵：図説。長岡・田中（1994）および『江戸鳥類大図鑑』を参照
本草写生図譜，山本渓愚，雄渾社
本草図説，高木春山，岩瀬文庫蔵：『本草図説』（リブロポート）を参照
本草余纂，小原桃洞，杏雨書屋蔵：該当個所は獣部の「鮓答」の項
水谷禽譜，水谷豊文，国会図書館ほか蔵：『豊文禽譜』『水谷氏禽譜』も同本
見世物研究，朝倉無声，思文閣出版： ちくま学芸文庫版もある
見世物研究姉妹編，朝倉無声，平凡社
見世物雑志，小寺玉晁，三一書房
名陽見聞図会，歌月庵喜笑，美術文化史協会
百千鳥➡［唐鳥秘伝］百千鳥，城西山人，国会図書館蔵：刊本
山猫図説，桂川国寧 ⇨ 桂川の人々・続編，今泉源吉，篠崎書林
遊覧記，松森胤保，松森家蔵：磯野・内田（1989）を参照
羅葡日辞典➡ラホ日辞典の日本語：索引編，金沢大学法文学部国文学研究室編，ラホ日辞典索引刊行会
蘭畹摘芳筆録本，東博蔵：刊本『蘭畹摘芳』はそのほんの一部に過ぎない
蘭館日記➡平戸オランダ商館の日記（永積洋子訳，岩波書店：1627〜41を所収），長崎オランダ商館長日記（東大資料編纂所編・発行：1633〜47），長崎オランダ商館の日記（村上直次郎訳，岩波書店：1641〜54），長崎オランダ商館日記（雄松堂出版：1801〜23）
蘭山禽譜，小野蘭山，国会図書館蔵
若松興行見聞➡旧若松大角力芝居其他興行見聞留書 ⇨ 日本庶民生活史料集成 6 , 三一書房
和漢寄文 ⇨ 享保時代の日中関係資料 1 , 関西大学出版部
渡辺派鳥類図巻，神戸市立博物舘蔵：唐絵目利渡辺家蔵控図，成澤（1993A）参照

磯野直秀（1992），江戸時代の禽類図譜と養禽書，日吉紀要，11号
磯野直秀（1993），明治前鳥獣渡来年表，日吉紀要，13号
磯野直秀（1994），日本博物学史覚え書 2 , 日吉紀要，16号：該当するのは第 2 節
磯野直秀（1995），田中芳男の貼り交ぜ帖と雑録集，日吉紀要，18号
磯野直秀（1997），日本博物学史覚え書 5 , 日吉紀要，22号：該当するのは第 1 節，第 4 節
磯野直秀（1998），日本博物学史覚え書 6 , 日吉紀要，24号：該当するのは第 6 節
磯野直秀（2000），日本博物学史覚え書 9 , 日吉紀要，28号：該当するのは第10節

磯野直秀（2001），日本博物学史覚え書10，日吉紀要，29号：該当するのは第５節
磯野直秀（2002），日本博物誌年表，平凡社
磯野直秀（2003），博物誌資料としての『鳥写生図巻』，ＭＵＳＥＵＭ（東京国立博物館研究誌），584号
磯野直秀（2005），珍禽異獣奇魚の古記録，日吉紀要，37号
磯野直秀（2006），博物誌資料としての『お湯殿の上の日記』，日吉紀要，40号
磯野直秀・内田康夫（1989），『遊覧記』に見られる江戸の鳥類，日吉紀要，７号
磯野直秀・内田康夫（1992），『舶来鳥獣図誌』，八坂書房：『唐蘭船持渡鳥獣之図』と『外国産鳥之図』のほぼ全図を収録し，解説を加えた
岩生成一（1980），明治以前洋馬の輸入と増殖，吉川弘文館
上野益三（1989），『年表日本博物学史』，八坂書房
大庭　脩（1980），江戸時代の日中秘話，東方書店
大森　実（1976），江戸時代におけるオランダからの輸入物品目録稿，法政大学教養部紀要，24号
小西正泰（1993），虫の博物誌，朝日選書
小西正泰（1994），細川重賢 ⇨［彩色］江戸博物学集成，平凡社　　、
斎藤阿具（1922），徳川吉宗の洋馬輸入と和蘭馬術師の渡来，史学雑誌，33巻12号
斎藤阿具（1936），徳川吉宗と西洋文化，史学雑誌，47巻11号
白井光太郎（1934），［改訂増補］日本博物学年表，大岡山書店
鈴木惟司（2002～04），覚え書き：江戸時代初期小笠原で日本人船乗りたちが出会った鳥，東京都立大学小笠原研究年報，25～27号
宗田　一（1992），巣鴨御薬園預の渋江長伯，医薬ジャーナル，28巻３号
宗田　一（1994），バサル獣の渡来，医薬ジャーナル，30巻３号
田代和生（1999），朝鮮薬材調査の研究，慶應義塾大学出版会
長岡由美子・田中純子（1994），堀田正敦編『禽譜』について，ＭＵＳＥＵＭ，521号・524号
成澤勝嗣（1993A），江戸渡来珍鳥ばなし，月刊文化財，352号
成澤勝嗣（1993B），長崎派絵画の写実と吉祥，『花と鳥たちのパラダイス』，神戸市立博物館
成澤勝嗣（1998），怪鳥カズワル江戸を歩く，神戸市立博物館研究紀要，14号
松田　清（1987），駝鳥考，日蘭学会通信，1987年１号
山下幸子（1972），享保の象行列，地域史研究，２巻２号

謝辞

本年表の作成にあたって，フウチョウなどの図を内田康夫駿河台大学教授に同定していただきました。心から御礼を申しあげます。

初出索引：片仮名の品名は現和名または漢名の読み，平仮名は原記載名，数字は西暦年である。インコ類・ジャコウネコ類・ハト類については，個々の和名のほか，類名の個所にも重出してある。

アオスジヒインコ 1820
アカクサインコ 1814
アカヒゲ赤髭 1680
アカメカラスモドキ 1830
アヒル 1501 ➡タチアヒル
インコ音呼 1501，注３
　アオスジヒインコ 1820
　アカクサインコ 1814
　オオキボウシインコ 1826
　オオハナインコ 1813
　オオハナインコモドキ 1834
　オトメズグロインコ 1813
　キボウシインコ 1817
　キムネゴシキセイガインコ 1837
　コムラサキインコ 1827
　サトウチョウ砂糖鳥 1639
　シュバシサトウチョウ朱嘴砂糖鳥 1836
　ショウジョウインコ 1831
　ズグロインコ 1831
　ズグロゴシキセイガイインコ 1766
　ダルマインコ 1676
　ヒインコ緋音呼 1813
　ヤクシャインコ 1818
　ヨウム洋鸚 1832
　ルイチガイショウジョウインコ類違猩々音呼 1813
　ルイチガイヒインコ 1831
ウコツケイ烏骨鶏 1697
ウシウマ牛馬 1598
うみおしょう海和尚 1780
オウム 647
オオキボウシインコ 1826
オオバタン(オウム類) 1831
オオハナインコ 1813
オオハナインコモドキ 1834
オオフウチョウ 1697
オオルリチョウ 1830
オガサワラオオコウモリ 1675
オガサワラハシブトゴイ 1675
オガサワラマシコ 1675
オトメズグロインコ 1813
オナガキジ 1732
オナガバト 1831
オニカッコウ 1679
オランウータン 1792
オランダシシガシラ 1800
かあぷすかなありや 1788，注17
かあぷす鳥 1831
かいまん 1781 ➡ワニ
カササギ 598
カササギサイチョウ 1787
ガチョウ 820
カナリア 1709
ガビチョウ画眉鳥 1708
からくん➡シチメンチョウ
カラスバト 1802
カラムクドリ 1795
カンザシフウチョウ 注16
カンムリツクシガモ 1724
カンムリバト 1734
カンムリヒバリ 1831
キボウシインコ 1817
キムネゴシキセイガインコ黄胸五色青海音呼 1837
キュウカンチョウ 1612
キョン（シカ類）1833
キンカチョウ錦華鳥 1835
キンギョ 1502
キンケイ錦鶏 1550
キンバト金鳩・錦鳩 1717
キンパラ金腹 1697
ギンパラ銀腹 1787
ギンムクドリ 1816
クジャク 598，注１
クジャクバト 1711
クビワオオコウモリ 1642
クビワムクドリ 1763
クリチャヒワ 1831
クロウタドリ黒歌鳥 1839
クロヒヨドリ 1538，注４
コウテンシ告天子 1709
コウバイチョウ黄梅鳥 1805
コウヨウジャク紅葉雀 1770
コウライウグイス 1697
コウライキジ 1596
コウラウン紅羅雲 1789
コシジロヒヨドリ 1831
コシジロミツスイ 1819
コジャコウネコ 1794
コジュケイ小綬鶏 1727
コバタン（オウム類）1814
コフウチョウ 1792
コムラサキインコ 1827

コモンシャコ小紋鷓鴣 1767
サイチョウ犀鳥 1734
サカゲ反毛（鶏）1709
サケイ 1786
サソリ蠍 1758
サトウチョウ砂糖鳥 1639
サラワクスンダリス 1800
サンゴチョウ珊瑚鳥 1817
サンジャク山鵲 1697
シキチョウ四喜鳥 1788
シチセイギョ七星魚 1726
シチメンチョウ七面鳥 1639
シマキンパラ 1773
シマハッカン 1742
シマヒヨドリ嶋鵯 1538
じゃがたらばと 1734
しゃくはちばと尺八鳩 1802
シャコ鷓鴣 1697
ジャコウネコ麝香猫 1226
　コジャコウネコ 1794
　ジャワジャコウネコ 1814
　マレージャコウネコ 1813
ジャコウネズミ麝香鼠 1656
しゃむろばと暹羅鳩 1711
シャモ軍鶏 1697
ジャワジャコウネコ 1814
ジャワマメジカ 1833
ジャワヤマアラシ 1787
ジュウシマツ十姉妹 1717
シュバシサトウチョウ朱嘴
　砂糖鳥 1836
ショウジョウインコ 1831
シラコバト白子鳩 1773
シルバールトン（猿）1807
シロカザリフウチョウ 1806
シロガシラ白頭翁 1767
しろくま 1799
ズアカアオバト 1802
スイギュウ 671
ズグロインコ頭黒音呼 1831
ズグロゴシキセイガイインコ
　頭黒五色青海音呼 1766
ズグロチャキンチョウ 1805
スローロリス（猿）1778
セイケイ青鶏 1737
セイコウチョウ青紅鳥 1788
セイラン青鸞 1672
セマルハコガメ 1826
センザンコウ穿山甲 1765
ゾウ 1408
ソウシチョウ相思鳥 1709
ソデグロムクドリ 1831
タイカンチョウ大官鳥 1817
タイハクオウム 1831
タイマイ（海亀）1740
タイワンドジョウ 1726
タチアヒル 1788
ダチョウ 1658
ダルマインコ 1676
ダルマエナガ 1852
ダンドク壇特 1717
チクケイ竹鶏 1708
チャボ矮鶏 1697
チョウショウバト 1666
チョウセンメジロ 1766
チン狆 824
ツシマヤマネコ 1826
トウマル唐丸1697
トコジラミ床虱 1595
トラ 1575
ナンキンバト 1697
ナンキンムシ 1595
ネコ 889
ハイイロコクジャク 1736
ハイイロミカドバト 1799
ハクビシン白鼻心 1833
ばざる獣 1801
ハチドリ 1861
ハッカチョウ八哥鳥 732
ハッカン白鸐 1454
ハト
　オナガバト 1831
　カラスバト 1802
　カンムリバト 1734
　キンバト金鳩・錦鳩 1717
　クジャクバト 1711
　じゃがたらばと 1734
　しゃくはちばと 1802
　しゃむろばと暹羅鳩 1711
　シラコバト白子鳩 1773
　ズアカアオバト 1802
　チョウショウバト 1666
　ナンキンバト 1697
　ハイイロミカドバト 1799
　ハンキュウ斑鳩 1715
　ベニジュズカケバト 1730
　ベニバト 1831
　べんがらばと弁柄鳩 1730
　ほんごくばと 1734
　レンジャクバト 1831
バリケン 1734
ハリネズミ 1735
ハンキュウ斑鳩 1715
ぴいちい 1734
ぴいにす 1770
ヒインコ緋音呼 1813
ヒクイドリ火食鳥 1631
ヒゲガラ髭雀 1831

ヒツジ 599
ヒトコブラクダ 1821
ヒメウズラ 1813
ヒメコウテンシ 1831
ヒョウ 1595
ヒヨクドリ比翼鳥 1697
フウチョウ風鳥 1635，注16
ブタ 1501
フタコブラクダ 1803
ブンチョウ文鳥 1697
ヘキチョウ碧鳥 1667
ベニジュケイ紅綬鶏 1826
ベニジュズカケバト 1730
ベニスズメ 1697
ベニバト 1831
べんがらばと弁柄鳩 1730
ペンギン 1735
ホロホロチョウ 1819
ほんごくばと本国鳩 1734
まるてんちい 1734
マレージャコウネコ 1813
マングース 1727
ミナミヤイロチョウ 1820
ムジチメドリ 1849
むすくりあとかつとう 1727
メグロ目黒 1675
メンヨウ綿羊 1775
モルモット 1843
モンシロチョウ紋白蝶 1758
ヤイロチョウ八色鳥 1691
ヤエヤマコウモリ 1642
ヤギ 820
ヤクシャインコ 1818
ヤツガシラ八頭 1653
ヤマアラシ豪猪 1643
ヨウム洋鸚 1832
ライオン 1865
ラクダ 599，注２
　ヒトコブラクダ 1821
　フタコブラクダ 1803
ラバ騾馬 679
ランチュウ 1748
りきうがも 1860 ➡カンムリツクシガモ
リス➡サラワクスンダリス
リュウキュウガモ 1831
リュウキン琉金 1780
ルイチガイショウジョウインコ類違猩々音呼 1813
ルイチガイヒインコ 1831
ルリカケス 1735
レンジャクバト連雀鳩 1831
ろいあーると 1778
ロバ 599
ワウワウテナガザル 1809
ワニ 1780